NOA NOA

VOYAGE DE TAHITI

ゴオガン

ノアノア

前川堅市訳

アルス版

TOKYO

ARS

NOA NOA

P. Gauguin





乳を飲ませる女

NOA NOA

Paul Gauguin

ポール・ゴオガン

ノアノア

前川堅市訳

«ARS»

序

「ノア・ノア」は、ゴオガンとその友シャルル・モオリスの共著である。
モオリスは、ゴオガンがタヒチの最初の旅から巴里に歸つて來た時（一八九三）そのタヒチの作品を見て、「畫家の題材に關する文學的作品を作つたらどうだらうと思つた」とそのゴオガン傳に書いてゐる。この計畫は、すぐゴオガンの同意を得た。そして、モオリスは詩を、ゴオガンは、タヒチ紀行、「腐敗した文明人と、素朴なブルウタルな野蠻人とを對照的に」書かうと考へた。
ゴオガンは、これを二度目のタヒチへの旅（一八九五――一九〇一）でも書き、その臨終の地ドミニイク（一九〇一――一九〇三）でも書いた。そして、最初は雑誌ルヴュ・ブランシュに掲載されたが、すぐ休載になり、出版會社の見つからぬまゝモオリスが自費出版した。

モオリスは、ゴオガンのタヒチの作品（ウウヴル・タヒチアンヌ）を見て詩を見出した。そして、その旅行記を讀んで詩を書いた。若し、ゴオガンの紀行を、その「繪畫の題材に關する文學的作品」とすれば、モオリスの詩は、ゴオガンの繪畫、延いてはその「ノア・ノア」の説明的詩歌と解して好いと思ふ。

この飜譯につかつたジ・クレエ社の決定版には、モオリスの修正したゴオガンの紀行と、モオリス自身の詩が、交互に章を交へてゐる。然し譯者は、そのモオリスの詩を全部除く事にした。それはただ、讀者自身、ゴオガンの繪畫並びにその「ノア・ノア」のうちから、各々自分の詩を見出されるであらうと思つたからである。

タヒチの島は、ハワイの南方、佛領ソサイエテイ群島の中にあり、南緯一七度三九、西經一四九度三〇の處にある。地圖に依れば、我が四國の三分の一にも及ばない島である。

本文中に挿入した木版畫は、ゴオガンの畫をその友ダニエル・ド・モンフレが模寫して

刻んだものだ。

ノア・ノアはマオリイ語で、香氣ある、芳ばしい、さういふ意味に當る。

この譯書出版は、いつに高倉輝氏の好意に依る。此處に厚く御禮を申し上げる。

大正十五年八月

前川堅市



目次

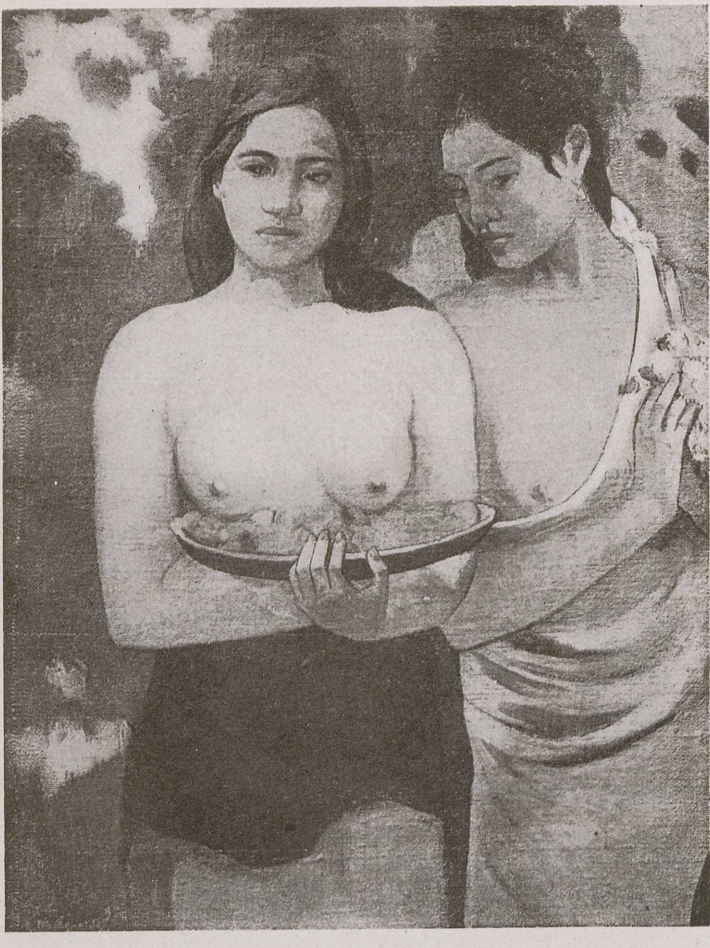
装幀・恩地孝四郎氏



自　畫　像　（ダニエルに贈れる）



タヒチの女



赤き花を付けた乳房



母　　親



戀　人



心よき日



白　　馬



馬に乘れるタヒチ人



NOA NOA
VOYAGE DE TAHITI

ノア・ノア
タヒチの旅




LE
CONTEUR
PARLE :



第一章

「……言ひたまへ、何を見たまひしや？」

シヤルル・ボオドレエル（旅）

六十三日間の變化ある航海の後、私達は、六月八日の夜、海の彼方に稻妻のやうに開けた灯を認めた――その六十三日間、私は憧憬の土地に對して、堪え難い待ち遠しさと、何とない苛々しさを感じてゐた――暗い空には、鋸形の黒い圓錐狀の山影が散つてゐる。

船はモレアを廻り、タヒチが見えた。

數時間の後、夜はほのぼのと明け初めた。船は船首を金星の方に向けて、靜かに環礁に近寄りつゝパペエテの水道に入つた。そして、何の船傷もなく波止場に錠を下した。

最初見たところ、この小さな島には、何の不思議なところもなかつた。例へば、リオ・デ・ジヤネイロのすばらしい港に較ぶべくもない。勿論私は、比較しようなどといふことは考へずに、ぢつとこの島を見凝めてゐた。それは、太古ノアの洪水に沈められた山の頂とも見えた——その昔、僅かにその頂だけが水面に出てゐた。そして、ある家族が、其處に脫れて來て生活の根をおろした。珊瑚はその新しい島を取りまき被うて蔓つた。次第にその家族は殖えて行つた。然し、その種族本來の孤獨な性格を、今も尙保つてゐる。そして、海のみが、その偉大さを高調するやうに鳴つてゐる。

朝の十時頃、私は總督（黑人ラカスカアド）を訪ねた。彼は私を重要な地位にゐる人間のやうに扱つてくれた。それは、私にはよくわからないが、フランス政府が私に依託した使命の爲だと思つた。

「藝術上」の使命、それがこの旅の目的だつた。然し、この言葉は、黑人にとつて、政治的間諜と同じ意味だつた。私は、その誤りを解く爲に、あらゆる努力を傾けた。然し駄目だつた。彼を取り圍んでゐる人々も、皆彼の誤解をそのまゝ受けてゐた。そして、私の使命が何でもないものだと言つても、誰も信じようとはしなかつた。

このパペエテの生活は、すぐに私には重荷になつて來た。其處は、私が脫れて來たと信じてゐる歐洲に等しいのだ。殖民地風の輕佻な空氣、滑稽にさへ思はれる幼稚な奇怪な模倣、それらの今も尙次第に增して行くやうな國なのだ。私が、こんなに遠く、遙かに探し求めて來た土地ではなかつた。

然し、或る社會上の事件が、私の興味を引いた。

その頃、ポマアレの國王が頻死の病床にあつた。そして、人々は、每日每日、その悲しい臨終を怖れ乍ら待つてゐた。歐洲から來た商人、官吏士官兵卒、それ等の人達は、やはり街に談笑したり歌つたりし續けてゐた。然し、土人達は、重苦しい樣子で、宮殿の周圍に聲低く話し合つてゐた。波止場では、紺青の海上を、オレンヂ色の帆を掛けた數多の船

が、太陽に輝いてゐる環礁線の間を、いつもと違つて忙しさうに度々往來してゐた。それは、附近の島々の住民達だつた。彼等は、國王の臨終に——國王の死と共に、彼等の領土は、決定的にフランスから占領されて了ふのだ——居合はしたいと思つて、毎日毎日やつて來るのであつた。既に、神の啓示が、彼等にその國王の死を告げてゐたのだ。それは、國王の死の前には、毎時も、日沒頃、決まつたやうに、山の中腹に暗い線が現はれるからである。

國王は死んだ。そして、宮殿の誰でも見える處に、立派な元帥服を着せて安置された。私は、其處に皇后のゐるのを見た。その名はマアロウと言ふ。彼女は國王の部屋を花や織物で飾つてゐた。ある公職の長官が、私に、葬式の装飾を藝術的にしたいと言つて相談に來た。その時私は、何も言はずに、その皇后を指さした。彼女は、マオリイ族の立派な本能で、その周圍を潤してゐた。そして、彼女の觸れるもの總ては、藝術的な色彩を帶びてゐた。

然し、その頃私は、まだこの種族を十分に理解してゐなかつた。私は、憧れて來た人間

や事物に裏切られ、歐羅巴風の野卑な空氣に嫌惡を感じるばかりであつた。而かも私は、歐羅巴から輸入される不自然な無責任な諸々の事象の下に、この廢頽的種族の固く持つてゐるに違ひない彼等の眞實、美、卽國民性、さう言つたものを見分けるためには、まだ上陸して間もないのだつた。ある程度迄、私は盲目だつた。

だから私は、この旣に年老いた皇后を、まだ美しい處の殘つてゐる普通の鈍感な女位にしか思はなかつた。或は、その日彼女は、その血の中に流れてゐるユダヤ系の部分を、悲しみの餘りすつかり無くして了つてゐたのかも知れない。然し、其の後彼女を見た時、私は、彼女にマオリイ人特有の魅力を感じた。タヒチ人の血色が、まだその表に現はれてゐた。この婦人にも、その祖先タチの酋長の名殘が、その兄弟や家族達と同じやうに、偉大な眞に威嚴のある性格を殘してゐた。彼女は、その底に、豐かな同時に優美な、すばらしい彫刻的な體格を持つてゐた。その腕は、寺院にある二本の圓柱のやうに、圓々して眞直だつた。そして、廣く膨れ上つた手首の處に終つてゐる。——ふと私は、「三位一體」の偉大なる三角形を思ひだした程、それはゆたかな形であつた。その眼は、周圍の生物を急に

照らし、驪ては燒き盡して了ふやうな情熱を、漠然と知らしてゐるやうに輝くことがあつた。それは、この島自身嘗ては大洋の中から浮び上り、周圍の植物が、太陽の最初の輝きに花を開いたやうな輝きだつた。

あらゆるタヒチ人は、黑い服を着た。そして二日間續けて、喪中の聖歌を唱ひ、死の歌を唄つた。それが私には、ソナタ・パテティクを聽くやうな氣がした。

埋葬の日は來た。朝の六時、人々は「宮殿」を出た。軍隊と高官達は、黑服に白い兜をかぶつてゐた。土人達は、彼等特有の葬式の服を着てゐた。各區の土人達は、皆順序正しく進んだ。そして、各區の酋長は、皆フランスの旗を持つてゐた。是等の人々が、眞黑い大きな集團をなしてゐた。それは、やがてアルェ區で止まつた。其處には、何とも言へない記念碑が立つてゐた。そして、それが、周圍の雰圍氣と植物の裝飾に對して、痛ましい對照をなしてゐた。それは、セメントで結びつけられた珊瑚石の異形な塚である。黑人ラカスカアドはその地方の土語で演說をした。それを通譯がマオリイ人の參列者に飜譯して聞かせた。それから、新教の牧師が說教をした。最後に、皇后の兄弟タチが答辭を述べた。

式はこれだけだつた。人々は散會した。役人達は、馬車に群がり乘つた……それは、何だか、競爭から歸つて來るのを思はすやうだつた。

數日前から深い悲しみに沈んでゐた民衆は、道に散つて行つた。そして、無頓着なフランス人を中心にして、漸く笑ひ初めた。妻は夫の腕を捉り、尻を輕く振り乍ら、その大きな足で道の塵を卷き上げて、ファタナ川の邊に散つて行つた。そして、女達は、彼方此方の珊瑚礁に隱れて、そのスカートを腰迄上げ、行列や暑さに疲れた足や腰を冷やした。こんな風に身を淸めると、彼女達は胸を張り出してパペエテの道を歸り初めた。モスリンの着物の下には、健康な若い動物のやうな柔軟性と艶やかさをもつた乳房が浮び上り、そこには、二つの貝が附けられてゐた。そして、彼女達から、動物性と同時に植物性の混り合つた香りが、あたりに散つてゐた。それは、彼女達の血の香であり、髮に差してゐるくちなしの花の香であつた。——Teine merahi noanoa——今が、一番香の好い時だ。さう彼女達は、言つてゐた。

こんなにして、總ての事はまた常態に歸つた。もう國王はなくなつた。國王と共に、古

代の習慣や偉大さの最後の跡は消えて了つた。國王と共に、マオリィの傳統は亡びて了つた。何事も總て皆終つて了つた。文明が、さうだ！烏合の兵、交易、繁文縟禮が、勝利を占めたのだ。

深い悲哀が私の心を襲うて來た。こんなに遠く來ながら、自分の逃げて來た土地と同じやうなものを、また此處でも見ようとは！タヒチに抱いてゐた私の夢は、現實に依つて、殘酷に裏切られて了つた。私の愛したのは、昔のタヒチだ。然し私は、それがすつかり亡びて了ひ、この見事な民族が古代の輝きを少しも持つてゐないなどと考へて了ふことは出來なかつた。然し、遙かに遠い神祕な過去の跡がまだこの國に殘つてゐるとすれば、只獨り、何の手引も何の根據もなしに、如何してそれ等を發見すれば好いのだらうか？消えた火を再び搔きおこし、すつかり灰になつた中から、もう一度火を燃やすのだ……

どんなに悲觀してゐても私は探索を試みもせず、殊に、知り得ない儘にこの國を去つて了ふやうなことは出來なかつた。私は、間もなく決心を新にした。

パペエテを去れば、私は、歐羅巴の中心から遠ざかることになる。私は、荒涼たる原野

に、土人と共に、彼等と同じやうな全然自然の生活をすれば、忍耐に依つて、彼等の疑ひを晴らし得るだらうと考へた。

一人の憲兵が、喜んでその馬車と馬を貸してくれた。或る朝、私は私の小舍を探しに出かけて行つた。

私の女は、私に附いて來た。——その名をチチと言ふ。半ば以上英國人で、少しばかりフランス語を識つてゐた。その日彼女は、一番の晴着を着てゐた。そして、マオリイの習慣に從つて、耳に花を附け、自分で編んだ藤の帽子をかぶつて、麥藁製の花リボンの上には、オレンヂ色の貝殼の飾りを附けてゐた。その肩には、眞黑な髮の毛が垂れ下つてゐる。彼女は、馬車に乘ることを得意がり、綺麗な風をしてゐるのを得意がつてゐた。そして、彼女が金持の高官だと信じてゐる男の女であるといふ事を、ひどく威張つてゐるやうだつた。こんな風に、彼女は心から喜んでゐた。而かも、かうした尊大な樣子は、この種族の顏に現はれる壯嚴な樣子を、少しも馬鹿らしくはしてゐなかつた。彼等は、その封建制度の古い歷史と、偉大なる酋長の古き名殘とから、この消えて行かない自尊心の習慣を傳へ

持つてゐるのだ。

私は、彼等の利害の念に利い戀愛は、純粹の歐羅巴人には、佛蘭西で金で買へる女から受ける享樂のやうなしつくりした味のない事を知つてゐた。然し私は、そこにもつと外のものを感じた。それは、この眼や口は、決して虛言を吐くことが出來ないと言ふ事だ。あらゆるタヒチの女達にあつては、戀愛は、損德に拘はらず常に「戀愛」である程、生命懸けであり、本質的である。

さて、道はずつと早く過ぎて行つた。取留めもない雜談が續き、外には單調なまた豐かな景色が展開された。右手は常に海で、珊瑚礁や渺々たる水面が擴がつて、時々、波がはげしく岩に碎けて大きな水煙を立てゝゐた。

正午頃、私達は、四十五粁來て、マタイア區に着いた。

私は、その邊を步き廻つた。そして、かなり綺麗な小舍を見付けた。その持ち主は、その小舍を賃貸しにしてくれる事になつた。彼は、そのつい近くに、自分の住む家を建てゝゐるのだつた。

翌日の夕方、パペエテに歸つて來ると、チチは、自分も一緒に連れて行つてくれる氣なのか、そんな事を訊いた。

「もつとしてからだ。――四五日してから、俺が落ち着いてからだ」

私は、この半白人の女は、あらゆる歐洲人との接觸の爲に、自分の種族を忘れ、その白人との差違を無くして了つて、私の知りたいと思つてゐる事を何も敎へて吳れないだらうと思つてゐた。だから私は考へた。もつと內部に入つて、田舍の方へ行けば、自分の求めてゐる人間を見つけられるだらう。そして、たゞ面倒でも選び出しさへすれば好いんだ。而かも、田舍は町ぢやないんだから……

數日前から私は、少し病氣に罹つてゐた。その冬パリで感染した氣管支炎が、いまだに直つてゐなかつたのだ。だから私は、只一人でパペエテにゐる。さうだ！辛棒しよう、間もなくあの四十五粁の處へ行けるんだ。

「Ia orana Gauguin. ごめんなさい。ゴオガン」

かう言つて、私の部屋を訪ねて來たのは王女だつた。私は、腰にパレオを卷いたきりで、

床の上に横になつてゐた。かうした上流の婦人を迎へるには、全くふさはしくない不行儀な樣子だつた。

「御病氣ですの」と彼女は言つた。「お眼にかゝりに來ました」

「お名前は？」私は彼女に言つた。

「ヴァイチユア」

ヴァイチユアは、歐羅巴人がこの國の階級をすつかり破壞してからも、尙存在してゐる眞の王女だつた。然し、此處へ來てゐる彼女は、やはり跣足だ。そして、耳には花を着けて、黑い服を着てゐる。彼女は此の間死んだ叔父ポマアレ王の喪に服してゐるのだ。その父タマトアは、歐羅巴人との交際や、將軍としての待遇があるにも拘はらず、怒つた時には巨人のやうに人を撲つて、恐ろしき怪物の供物とするマオリイの一王族として、滿足してゐるやうな人だつた。

ヴァイチユアは、その父によく似てゐるといふ噂だつた。

私は、白帽子をかぶつてこの島に上陸するあらゆる歐羅巴人のやうに、この昔の權勢を

失つて了つた王女をぢろぢろ見廻はした。その疑ひ深さうな唇の上には、微笑が浮んでゐた。然し私は、禮儀を失してはならないと思つた。そして、

「よく來てくれました。一緒にアブサンでも飲みませう」と言つた。

私は、つい近頃買つて來て置いた瓶を指した。

彼女は冷淡に、然しひどく素直にその方へ歩いて行つた。そして、蹲んで瓶を取つた。彼女の透明な輕い着物は、その腰にぴつたり着いた。その腰は、確かに、この地球をも支へ得る程がつしりしてゐる。而かも彼女は、何の疑ふ餘地もなく王女である。その祖先は？――彼女の祖先は、勇猛にして偉大なる巨人達であつた。彼女の巖丈な肩の上には、頭がしつかりくつついてゐる。ふと私は、その食人の顎、喰ひ荒さうとしてゐるやうな齒、それから動物的な狡猾さに燃えてゐる眼、そんなものだけしか見えないやうな氣がした。だから私は、非常に綺麗な、而かも高尙な額を持つてゐるにも拘はらず、この女が全く醜く思はれた。殊に、若しも彼女が、この私の床の上に坐りにでも來ようものなら、忽ちこの輕い細工品は、我々二人を支へる事は出來ないに違ひない。處が、事實彼女は、このベ

ッドの上に腰を下したのだ。——ベッドは、メリメリと音を立てた事は勿論だ。
私達は、酒を飲み乍ら話し合つた。然し、お互に言葉がよく通じなかつた。度々沈默が續いた。私は彼女を觀察した。彼女は私をぢろぢろ見た。然し、酒だけは汲み合はした。
……ヴァイチュアはしつかり飲んだ。太陽は、早く傾いて行つた。ヴァイチュアは、タヒチの煙草をふかし乍ら、床の上に寢そべつた。その二本の跣足の足先は、まるで勇猛な虎の舌のやうに、ベッドの端の木を撫で廻はしてゐた。彼女の顔は、不思議に柔らいで生き生きして來た。私は、恐ろしい慾情に思ひ耽つてゐる猫の唸きを聞くやうな氣がした。男といふ者は、氣の變り易いもんだ！この時私は、彼女を美しいと思つたのである。すばらしく美しいと思つた。そして、彼女が、劍のある聲で、
「お前は綺麗だ」さう言つた時、ひどい惱ましさが私を襲うて來た。事實、確かに……王女は、氣持の好い女だつた。
やがて彼女は、ひどく低く而かも銅を叩くやうな聲で、ラ・フォンテエヌの童話「蟬と蟻」を初めから暗誦し初めた。

（それは、その姉達に教へられた、過去の少女時代の樂しい思ひ出にちがひない）
煙草は、すつかり煙になつて了つた。彼女は立ち上つた。そして、
「ね、ゴオガン、」と言つた。「私は、お前の國のラ・フォンテエヌは嫌ひだ」
「どうして！吾々は、人の好いラ・フォンテエヌ、さう呼んでゐる」
「善人かも知れない。でもあの人の惡い道德は嫌ひだ。
蟻！（彼女の口元に嫌惡の情が現はれた。）
蟬！私は蟬が好きだ。それは、綺麗な聲で上手に歌ふ。
常に歌ふ。
常にたのしむ……常に」
そして彼女は、橫柄につけ加へた。
「私達の國は、どんなに美しい國だつたことか、人も土も同じやうにその惠みを享けてゐた。年中私達は歌つてゐた。
私は、ひどくアブサンを飲んだやうな氣がする。もう歸へる、何だか、つまらない事を

しさうだから」

庭の戸口で、一人の青年が、ヴァィチュアに何か尋ねてゐた。それは、總ての事を知つてゐる風をしてゐるが、而かも何も知らない青年の一人で、この役所では、彼等を作家と呼んで區別してゐる。

ヴァイチュアは、uri（犬）を呼び乍ら遠ざかつて行つた。私は、枕に頭を伏せた。私の耳には次のやうな言葉が、私語のやうに殘つてゐた。

Ia orana Gauguin

Ia orana Princesse

間もなく私は、眠りに落ちて行つた……

* * *

もう私はパペエテにゐない。今はマタィア區に住んでゐる。一方は海で、一方はそゝり

立つた山だ。その恐ろしいやうな谷は、岩に倚り掛つたマンゴォの巨大な密林を遮ぎつてゐる。山と海との間にブウラォ木造りの私の小舍が立ち、その傍に小さな小舍がある。——それは、食堂だ。

朝、私は、岸邊に近く丸木舟の浮いてゐるのを見た。その中には、一人の女が乘つてゐる。岸邊には、殆んど全裸體の男がゐる。そして、その傍に枯れた椰子の樹がある。それは、まるで、きらびやかな尾を垂れて、その爪の中に大きな椰子の房を摑んでゐる巨大な鸚鵡のやうに思はれた。男は、重い斧を兩手で持つて、調子よく敏捷に上げ下げしてゐる。その斧は、輝いた空に青色の煌きを殘し、下の枯木の切口からは、一世紀もの間毎日毎日蓄へられて來た熱の炎を、一瞬間に閃めかしてゐた。

紫色の土の上には、黄金色をした蛇のやうに長い葉が、遙かに遠い東洋の文字で書かれた字のやうに見えた。——私は、オセアニヤの原語で書かれた次のやうな文字を讀むやうな氣がした。——Atua, Dieu（神）, le Taata, 或は、Takata, それらは、印度から四方に擴がつて、あらゆる宗教の中に見出せるものだ……

タタガアタの眼には、國王や大臣達のきらびやかな威嚴も、只一片の塵芥にすぎない、

その眼には、純も不純も、たゞ六人のナガの踊りにひとしい。

その眼には、佛の道を求むるは、花を求めると同じだ……

丸木舟の中では、女が網を揃へてゐた。紺青の水面は、珊瑚に落ちる綠色の波頭で時々崩されてゐた。

その夕方、私は、煙草を喫し乍ら、海岸の砂地の方へ散步に出た。水平線の上に、あはたゞしく落ちて行く太陽は、右手に見えるモレアの島にもう半ば以上も隱れてゐた。餘影が、燃えるやうな空に、力強くはつきり山を黑く染めてゐた。その山の頂は、昔の先端の尖つた城のやうな形をしてゐた。

かうした自然と相對して、自ら封建時代の思はれて來たのは、わけのない事だらうか？向ふにある山の頂は、壯大な兜のやうな形をしてゐる。それをめぐる海は、恐ろしい群集のやうな音を立てゝゐる。然し、その騷音もその頂迄は屆いて行くまい。只獨り、偉大な

る崩壞の中に立つて、この保護者なる兜は、蒼空近く動かない。

其處からは、祕そかな眼が、海の底深く投げられてゐる。海には、智慧の樹に觸れた罪人や神を犯した罪人の群が數多く呑まれてゐるのだ。そしてこの「兜」も亦一つの神だが、私には、どういふ類似からかスフィンクスを想ひ出させた。そして、その口をなしてゐる廣大な裂目から、皮肉や慈愛の微笑が、過去の眠つてゐる波の上に投げかけられてゐるやうな氣がした。夜は早く落ちた――モレアは眠つた。あたりには靜寂が漲つて、私は、タヒチの夜の靜けさを泌々味つた。

たゞ、私の心臟の鼓動が聞えるのみだ。私は、床に寢ながら、差し込んで來る月の光で、小舍の前に同じ間隔を置いて植ゑられてゐる竹を見ることが出來た。それは、昔の野笛と呼ぶ樂器で、タヒチ人はヴィヴォと呼んでゐる。それは、晝の中は沈默を守つてゐる樂器だ。そして、夜となれば、月の光に誘はれて、思ひ出の中に、私達に心地よき旋律を響かしてくれる。私は、この音樂を聞き乍ら眠りに落ちる。空と私との間には、蜥蜴の住むパンダヌスの葉で葺いた輕い高い屋根があるだけだ。私は、深い眠りに落ちながら、上にあ

る大空や自由な星の世界を想ひ描く事が出來た。私は、牢獄のやうな歐羅巴の家からは、遙かに遠く來てゐたのだ。このマオリイの小舍は、生命の個性や、空間や無限を少しも遮らない。

こんなにして、私は此處に只獨り孤獨であつた。そして、この地方の人々とはお互に觀察し合つた。然しまだ、私と彼等との間には、解き得ない隔りが殘されてゐた。

二日目から私は、私の蓄へをすつかり無くして了つた。如何すれば好いのだらう？　私は、金さへあれば、あらゆる生活の必需品は求め得らるゝものと信じてゐた。然し、これはひどい間違ひだ！今は、生きる爲には自然に賴つて行かねばならない。自然は豐かで、而かも寬大だ。その木や山や海に蓄へてゐる寶物を、分けてくれるやうに賴んで行けば、自然は決して拒まない。然し、高い木に攀ぢ登り、深い山にわけ入ることを知つてゐなければならない。そして、重い荷物を持つて歸らねばならない。魚を取り、水に潛つて珊瑚にくつついてゐる貝殼を、海の底から取り離して來なければならない。

然し、私は文明人だつた。而かもこの場合には、周圍に住んでゐる幸福な野蠻人よりも

遙かに劣つた人間であつた。其處では、自然から生れて來ない金錢は、自然から生産される必需品を得るに何の役にも立たない。私は空腹を抱へて、私の立場の事を悲しく思ひ惱んでゐた。其の時一人の土人が、叫び乍ら手眞似で私の方に話しかけて來た。非常に表現的な態度で、ある言葉があらはされた。私は、それがよくわかつた。——近所の人が、私を食事に招いてくれてゐるのだ。然し私は恥かしかつた。私は頭を振つて斷つた。すると暫くして、小さな娘が、私の小舍の戸の閾の上へ、青々した新鮮な木の葉で包んだ食物を置きに來た。そして、何も言はずにそのまゝ歸へつて行つた。私は空腹だつた。だから私は默つてそれを食つた。また暫くすると、一人の男が、私の小舍の前を、微笑みながら、只一言、ものを問ひかけるやうな樣子で通り過ぎて行つた。——Paieu（パイウ）?——それは、「滿足だつたか?」さう言つてゐるのだとわかつた。

この事が、この野蠻人と私との交際の始りだつた。野蠻人! この言葉が、食人齒を持つた黑人の事を考へると、何時もきまつて浮び上つて來るのだ。

然しながら、私は旣に彼等の實際の好意を理解し初めてゐた。いつか、靜かに澄んだ眼

をした小さな褐色の顔が、ギロモンの大きな葉蔭の下で、土につく程にしてかくれてゐた事があつた。その子は、私の知らない間に、私の方を觀てゐたのだ。そして、その眼が私の眼に行きあふと、そのまゝ飛び去つて了つた。……私達は、お互にその觀察の對照であつた。私は、彼等にとつては、言葉も習慣も、最も原始的な勞働も、自然的な生活も、何一つ知らない未開の人間であつた。彼等には、私はやはり一人の野蠻人であつた。そして、多分眞の野蠻人は、私だつたと思ふ。

*
* *

私は、仕事を初めた。あらゆるものゝノートやスケッチを取つた。然し、新鮮な燃えるやうな色彩が、私を幻惑し盲目にした。何日頃からかわからないが、私は、正午頃から二時頃までも求めに求めてゐた。見たまゝを、何の構想もなしに、赤や青にカンバスの上を描いて行くのは、全く容易な事だつた！小川の流れにある輝いた構圖が、私を恍惚とさせ

た。而かも何故私は、この太陽の金色の輝きや、あらゆる歡喜をカンバスの上に描かうとして躊躇したのだらうか？　歐羅巴の古き習慣、廢頽し行く流派の表現の憶病さよ！……
また、非常に特長のあるタヒチ人の顔をはつきり掴み、そのマオリィ人の魅力ある微笑を掴みたいと思つて、私は、前から、純粹のタヒチの血統を持つた近所の女の像を描かうと考へてゐた。
或る日私は、モデルになつて貰ふ女に、私の小舍へ來て、繪畫の寫眞を見るやうに言つてみた。その女は、オラムピヤを、殊更興味深さうに見凝めてゐた。
「その繪をどう思ふ？」私はその女に訊いてみた。――（私は、數ケ月前から、もうフランス語は使はずに、タヒチの言葉を少しばかり覺えてゐたのだ。）
女は答へた。
「この女は大變綺麗だ」
私は、この答に微笑み、同時に感動した。この女は、「美」の感覺を持つてゐたのだ！　然し美術學校の先生方は、この女に就いて何と言ふだらうか？　女は、突然、色々に考へなが

ら默つてゐたらしい沈默を破つてつけ加へた。

「これは、お前のお嫁さんか？」

「さうだ」

私は、虛言を吐いた！私が、オラムピヤの「男」であらうとは！

私は、この女が、伊太利のプリミチフ（ルネッサンス派直前の美術家）の宗敎畫をひどく不思議さうに見てゐる間に、この謎のやうな微笑をしつかり摑まうと思つて、その像を描き初めた。すると彼女は、不機嫌さうに唇を尖らし、まるで怒つたやうな調子で言つた。

「Aita. いけない」そして逃げて行つて了つた。

然し、一時間程すると、また彼女は、新しく美しい着物を着、耳に花を差してやつて來た。

どんな事を考へたのだらう？どうして、またやつて來たんだらう？それは、嬌態の一つのあらはれなのだらうか？拒んだ後で、また從つて來る快感からなのだらうか？それとも、

禁斷の木の實に心を惹かれた爲だらうか？ または、マオリイ人のよくやる何の動機もない單純な出來心なのだらうか？ 私は、畫を描かうとする事は、モデルの內生命を深く研究することと同じやうなものだと思つてゐた。それは同時に女を絕對的に自分のものにするやうに、暗默の中に而かも切實な懇望を持つて、肉體をも獲得する程でなければならないと思つてゐた。

然し、彼女は、歐羅巴の美學の規則を以てすれば、決して可愛い女だとは言へなかつた。だが、美しかつた。その顏の總ての輪廓は、曲線の綜合の裡にラファエル風の調和を示してゐた。その口は、あらゆる言葉や、思想接吻歡喜苦惱、それらを物語る彫刻家に依つて、浮彫りにされてゐるやうだつた。私は、彼女の中に、未知の苦惱と憂鬱な悲哀が、歡喜と混り合つてゐるのを感じた。而かも、表面上は、打ち負かされてゐるやうに見えるこの默從は、事實として、霸氣滿々たる氣持を殘してゐるのだ。

私は、急いで仕事を續けた。——この女の好意が、何時迄續くか疑はしいものだつたからだ。——私は、急いで而かも情熱を込めて仕事をした。私は、眼に見えるあらゆるもの

を、その肖像の中に描きこんだ。然し、その眼だけは描く事が出來なかつた。そこには、抑壓された力の强い炎が燃えてゐた……その非常に高尙な額は、膨れ上つた線のある爲に、次のやうなエドガア・ポオの言葉を思ひ出させた。――「均勢の中に、何か異樣な點があつて、初めて完全な美があり得る」女の耳に附けてゐる花は、その香をあたりに放つてゐた。

今私は、前よりももつと自由に働いてゐる。

然し私は、孤獨の寂しさに堪へられなくなつて來た。私は、眼の綺麗に澄んだ、若い純粹のタヒチの女を澤山見かけた。而かも、彼女達の中には、誰か進んで私と生活を共にしようと思つてゐるものがゐたかも知れない。殊に彼女達は皆捉へられたがつてゐたのだ。マオリィ風に、一言の言葉も掛けずに野蠻的に捉へられたがつてゐたのだ。彼女達は、總て皆、ある程度まで犯されたい慾望を持つてゐたのだ。然し私は、男を持つてゐない女達の中にゐて、その女達が、私や他の男達を、ぶしつけに威張つて高慢さうに凝見めてゐるのを見ると、事實ひどく氣おくれのしたものだつた。

殊に彼女達の多くは、病氣を持つてゐると言はれてゐる。——それは、疑ひもなく歐羅巴人が文明の第一要素、根本的要素として持つて來た惡い病氣に違ひない。

老人達が、あの女をお取りなさい、さう言つて女達の一人を指してくれても、私は、それを受けるに必要な大膽さと勇氣を持つてゐなかつた。

それで私は、チチに、私が彼女を喜んで貰ひ受けると言ふ事を言つたのだつた。而かも彼女は、パペエテでは、澤山の男を隱してゐると言ふので恐ろしく評判の惡い女であつた。……

然しこの最初の試みは、間もなく失敗に終つた。私は、この官吏達の贅澤な生活に慣れて了つてゐる女を、自分の伴侶とすることに飽いて了つた。私は、既に野蠻性を味ひ、その中にすつかり入り込んでゐたのだ。だから私は、數週間の後、チチと再び相逢ふことなく別れて了つた。

また更めて孤獨が來る。







第二章

近所の人々は、殆んど私の友達のやうになつた。私は、彼等と同じものを着、同じものを食ふ。そして、仕事をしてゐない時には、ふと急に氣むつかしくはなるが、常に陽氣で歡喜に滿ちてゐる彼等と生活を共にした。

夕方になると、上には椰子の葉の生ひ重なつた密林の下に、男も女も子供等も皆群をなして集まる。或る者はタヒチ人だ。ある者はトンガ人、アロライ人、そ

れからマルキイズ人もゐる。彼等の艶のない體は、天鵞絨のやうな木の葉と、快い調和をなしてゐる。そして、その銅色の胸からは、椰子の幹の荒肌を撫でて消えて行く震へた旋律が放たれる。第一の歌ひ女は初める。高慢な小鳥のやうに、彼女はすぐに情熱の虜になつて了ふ。その力強い叫び聲は、高くなり低くなり、他の人人の聲が忠實な衞星のやうに合唱してゐる間を、まるで小鳥のやうに飛び交うて聞える。やがて皆は、只一人の野蠻な叫び聲に依つて、その歌を急調子のまま一齊に止めて了ふ。これは、タヒチの歌、les iménés（聖歌）である。

また或る時には、人々は歌つたり話し合つたりする爲に、一種の集會小舍に集つてくる。其處では、先づ祈りから初まる。最初、老人が忠實に祈りを稱へる。他の人々は、それに續いてそれを繰り返し繰り返し稱へる！それから皆は歌ひ初める。時には、笑ひ話の出ることもある。稀には、眞面目な問題に就いて議論し合ふ。そして、いかにも聰明な事を言ひ出す。

ある夜私は、次のやうな事を聞いて、驚かずにはゐられなかつた。

「俺達の村には」と一人の老人が言ひ出した。「大分前から、方々に屋根は腐り半ば開いて雨降りには水の漏れてくるやうな壞れた家がある。それは何故だらうか？人間は總て家で保護されねばならない。材木や樹の葉は十分にある。それで屋根を葺けば好いのだ。俺は次の事を提議する。もう住めなくなつてゐる小舍の代用に、廣大な嚴丈な小舍を建てよう。その爲に暫くの間皆共同して働かうぢやないか。俺達は順々に俺達の腕を差し出さうではないか」

座にゐる人々は、一人殘らず拍手した。

「それは好い」

そして、その老人の提議は、滿場一致で可決された。

此處に聰明な民衆がゐる。その夜私は、小舍に歸へり乍ら、さう思つたものだ。

然し、その翌日、決議された勞働が初まつてゐるかどうかを見に行くと、誰ももうそんな事は考へてもゐない事がわかつた。私が尋ねると、皆は、あの夢みるやうな額の上に、はつきりした線を描き出す曖昧な微笑を浮べるだけだつた。私は、その間に、うまく調和

しない考へに滿たされ乍ら歸つて來た。――彼等が、老人の提議を喝采したのも本當の事なのだ。また、その可決した事を實行しようとしないのも、恐らく本當の事なのだ。彼等は、どうして働かねばならないのだらう？タヒチの神々は、その忠實な人達に、日々の糧を與へてゐるではないか？然し、明日はどうだらう？多分同じやうに與へるであらう！そして太陽は、明日もまた、今日のやうに喜ばしく朗らかに登るであらう。此處には、不眞面目と輕卒さとが漲つてゐるのだらうか、それとも――それを誰が知らう？――最も深刻な哲理があるのだらうか？聱澤を避けよ、救濟に名をかりて趣味に墮することを避けよ！さういつた風な哲理が……

毎日毎日私は、居心地よく暮すやうになつた。そして、その言葉も、不便を感じないだけに覺えて了つた。近所の人達は――三軒はつい近くにあり、その他の多くはずつと遠方にゐる――私を、彼等と同じやうに扱つてくれる。私の足は、いつも小石を踏んでゐるために、すつかり硬くなつて土とも親しみを感じるやうになつて來た。體はいつも裸で、太陽の光も、もうそんなに辛くなくなつた。

文明は、次第に私から消えて行つた。私は物事を單純に考へ初めた。近隣の人々に對しても、なるべく嫌惡を感じないやう、――それよりももつとよく愛しかけて行くやうに考へ初めた。私は、動物的な、同時に人間的な自由な生活を享んだ。そして、不自然から遠ざかつて、自然に入り込んで行つた――今日の日が、自由で美しいやうに、明日も亦こんなであらうと思ふ確信をもつて。平和は、私に落ちかかつて來た。私は、順當に啓發されて行つた。そして、もう徒らな心配はしなくなつた。

一人の友達が、彼の方からやつて來た。而かも、全く！この友達は、何の下心も持たずにやつて來てくれたのだつた。それは近所の青年で、非常に綺麗な單純な青年だつた。彼は、私の彩色した繪畫や、森の中での仕事にひどく好奇心を持つてゐた。彼の問に對する私の答は、彼に教へる所があつた。その日以來彼は、私の畫を描いたり彫刻したりしてゐる處を見に來ない日はなかつた。

そして、夕方の仕事休みの時には、私達は、お互に話し合つた。彼は、好奇心に燃えた野蠻な青年らしい態度で、歐羅巴の事に就いて、殊に戀愛の事に就いて質問した。そして、

私は、度々その質問に困らされた。然し、彼の答は、その質問よりももつと無邪氣なものだつた。

或る日私は、彼に道具を渡して、彫刻をやつてみるやうに話してみた。彼は、ひどく驚いて私を見てゐた。そして、私が他の人間とは違つた人間で、他の人々の出來ない事をする人間なのだ、そんな事を單純に眞面目に言つた。私は、こんな言葉を——こんな子供のやうな言葉を私に敎へてくれたのは、彼ヨテフアが最初だと思つてゐる。藝術家が、何かに有用であらうとする爲には、ヨテフアの言ふ通りでなければならないのではないだらうか……

私は、彫刻の材料に、バラの木が欲しくなつて來た。木目は細く、而かも太いのが入用だつた。私は、ヨテフアに相談して見た。

「山の中へ入つて行かねばならない」と彼は言つた。「私は、ある所に、澤山見事なのがあるのを知つてゐる。欲しいんだつたら案內しよう。そして、氣に入つたのを切つて、二人で持つて歸ればいい」

そこで私達は、ある朝早く出掛けて行つた。タヒチに於ける印度風の小徑は、歐羅巴人にとつてひどく歩き難い。攀ぢ登ることの出來ない兩側の山の間には、二つの高い玄武岩の岩壁が立つてゐる。そして、その裂目には、岩を傳つて湧いて來る蛇のやうな水が流れてゐる。それが、いつかは小川となり、急流となり、やがては遙かの海に流れて行くのだ。

この小川の兩側には、變化の多い眞の瀧と言つて好い瀧が方々にあつた。そして、鬱蒼たる樹の間には、徑のやうなものがついてゐた。パンの樹、蘇鐵、パンダヌス、ブウラオ、椰子、巨大な羊齒、名もわからない植物、そんな樹々が繁つて、島の中央の方へ登つて行くにつれて、益々錯雜し、益々蠻地らしくなつて來た。

私達は、二人共裸で、腰にリンネルを巻きつけ、手には斧を持つて、度々、新しい路を探す爲に、小川を渡らねばならなかつた。私の連れは、その新しい山路を、眼で探し出すより、鼻で嗅ぎ出して見つけるやうだつた。あたりには、草花や木の葉や花が、一面に滿ちて、輝かしい混亂を投げてゐた。

靜寂はあたりに漲つて、只岩を通ふ水の音のみが、沈默の伴奏のやうに單調な響きを立てゝゐるのだつた。

そして、このすばらしい森林の中には、この孤獨な沈默の中には、ただ私達二人がゐるだけだつた。——彼は、まだ春秋に富む青年であり、私は、數多の幻影に疲らされて、心の弱くなつてゐる殆んど老人と言つても好い人間だ！數多の努力と、道德的にも精神的にも疲弊してゐる社會の惡を、長い間運命的に受け繼がされてすつかり氣力を失つた人間なのだ！

彼は、男とも女ともつかぬやうな柔らかな體を、まるで動物のやうに身輕に動かし乍ら私の前を歩いて行つた。——私には、彼が、この周圍にある植物の輝きを呼吸する權化のやうに見えた。そして、私を醉はす美の香が、彼から發散してゐた。我々の間には、單純と複雜の相互の魅力から生じる、あだかも强い精のやうな友情が通ひ合つた。

この私の前を歩くのは、果して人間なのだらうか？——この裸體民族に於ては、我々の民族とは異なり、恰度動物界と同じやうに兩性の差違がはつきりしてゐないのだ。我々は、

女性を働かせずに、卽彼女等の啓發される機會を與へずに、女性は弱い者だと力說してゐる。そして、理想主義的な虛言家にだまされて、女性を纎細なものだと決めて了つてゐる。

タヒチに於ては、太陽の光線が、男女兩性へ同じやうに光を投げかける。同時に、森林や海岸の空氣が、皆の肺臟を强健にし、肩や腰、延いては海濱の砂までも大きくするのである。女達は、男と同じ仕事をやる。男達は、女達に對して呑氣なものだ。——だから、女達には、男性的な處があり、男達には、女性的な處がある。この兩性の近似は、彼等の關係を安易にする。そして、その生涯の裸體生活を淸純に保つて行くのだ。彼等の風習からは、奇妙な特權、骰子遊び、氣の利いた搔つ淩ひ、こんな事は、考へても出て來ない。——かうしたものは、文明國に於ては、變態的な外觀を表はし、恥づべき色彩を帶び、時には、戀の祕事ともなるのである。

この「野蠻人」間の兩性の差違の減少は、その男女達を、戀人同志のやうな親しい友達にして了ふ。そして、彼等の間には、罪惡の觀念などはすつかりなくなつて了ふのだ。而かも、どうしてこの年老いた文明人に、この事が今新しい未知の恐ろしい幻惑を喚起せし

めるやうな事になつたのだらうか？――私は、この時惱ましい氣持になつたのである。殊に私達は、唯二人だ。私は何だか罪を犯しさうな豫感を感じた……

然し恰度その時、その徑がつきてゐた。友達は、小川を横切つて曲つた。その動作から、私は彼の胸をもう一度はつきり見た。

すると、もう兩性の幻影は消えて了つた。彼はやはり若き男性であつた。その無邪氣な眼は、靜かな水のやうにはつきり澄んでゐた。

私の心は平靜に歸つた。そして、小川の冷たい水の中へ飛び込んだ時には、精神的にも、肉體的にも、限りない喜びを感じた。

「冷たいだらう」と彼は言つた。

「いゝや、ちつとも！」私は答へた。

この叫び聲は、今私が、私自身の裡に、あらゆる腐敗した文明と戰つて、斷然勝利を占めた爭ひの終結を告げるやうに思はれた。それは、山々の向ふへ、響きよく木精した。自然は私を包んでくれたのだ。私をよくわかつてくれたのだ。私を、その一人の子供のやう

にもてなしてやらう、さういふ氣持で、大きな聲をあげてくれたのだ。

私は、密林の中へ、この慈母のやうに廣大な自然の中へ、溶け込んで行くやうな氣持で元氣に這入つて行つた。私の友達は、やつぱり私の傍にあつて、その徑を續けてゐた。その眼は絶えず靜かに澄んでゐる。そして、何の疑惑も感じてゐないやうだつた。――只私だけが、惡い幻想の重荷を脊負つてゐたのだ。

やがて私達は目的地に着いた。其處には、嶮岨な山壁が口を擴げて立つてゐた。そして、縺れ合つて幕のやうになつた樹々の後には、祕められたやうな一種の高原が擴がつてゐた。然し、私の案内人は、それをよく知つてゐた。そして、其處には十本ばかりのバラの木が、その廣い枝を擴げてゐた。私達は、その中の一等好い幹に斧を當てた。私の材料に都合の好い枝を取る爲には、それを幹から切り倒さねばならなかつた。

私は、どんな神聖な野蠻性からか知らないが、自分のうちに滿ち滿ちてゐた幸福の熱情を以て、その木を擊つた。私の手は、血みどろになつた。然し、私の擊つたのは、木ではない。私が打ち倒さうと思つたのは、木そのものではないのだ。私は、斧を地に置いてか

らも、尙他の幹の上でそれが唄つてゐるのを聞くやうな氣がした。そして、その斧が私に、響き渡る音律につれて、こんなことを言つてゐるやうな氣がした。

すべての森を切りつくせ
その芽はすでに、いまはしき黄泉の息をお前に投げかけた。
お前の持つてゐる利己の愛を打ち毀せ、
秋ともなれば人々の、ロオタスの花切るやうに！

毀れて了へ、この後は、すつかり死んで了へ、文明を浴びた老人よ！私は蘇つた。或は、私の裡に純な力强い人間が生れて來たと言ふ方が好いかも知れない。この力强い打擊は、文明並びに惡への最上の訣別の辭としてふさはしいものだつた。この私の呼吸してゐる淸純な空氣と、廢頽的な魂の中にひそんでゐる墮落した本能とが、その對照と驚異とから、私の今すでに修得した聖なる單純な生命に、不思議な魅力を與へた。この內部的經驗は、

換言すれば征服を經驗したことであつた。私はもう他の人間になつて了つたのだ。私はマオリイ人であり、野蠻人である。

ヨテフアと私は、清澄な喜びに滿ちて、バラの木——ノアノア！——の重い奴を擔ぎながら小舍の方へ歸路についた。

そして、すつかり疲れて、小舍の前まで歸つて來た頃には、まだ太陽は沈んでゐなかつた。

ヨテフアは私に言つた。

「面白かつた？」

「あゝ」

そして、私は、心のうちで、よかつたとも、よかつたとも、さう繰り返してゐた。

私は、この木の枝に魂を込めて打ち込んだ。そして、刻む度に、强い勝利と若やいだ香を感ぜずにはゐられなかつた。

プナルウの谷から、——それはタヒチの廣大な龜裂だ——タマノオの高原に行く事が出來る。其處からは、島の中央なるディアデーム、オロフエナ、アロライの山々が見える。數多の人々が、私に其處の事を話してくれた。私は、唯一人で其處に行き、數日を過して見ようと思つた。

「然し、夜はどうする？」

「お前は、テユパポオ（惡魔）に襲はれるだらう」

「それは餘り亂暴すぎる。それとも氣でも狂つたのか、あんな山々の精靈達を掻き亂しに行かうなんて！……」

このタヒチのよき友達たちの心配さうな忠告が、却つて私の好奇心を唆つた。

私は、ある朝出立した。

* *
*

二時間程行くと、路は、プナルゥの川に沿うて續いてゐた。然し聽ては、如何しても、この川を度々繰り返して渡らねばならなくなつた。殊に、兩岸からは、次第に山壁が嶮岨に迫つて來た。そして、深い流の眞中まで、その岩の尖端が突出してゐる。どうする事も出來ない。私は、水中を歩かねばならなくなつた。その水は、時には膝迄、時には肩迄も越して來た。

ひどく高い兩側の山壁の間から、太陽は、空高くただ一つの點のやうにしか見えない。紺靑に澄み切つた空には、日中でも、星の輝きが見える位だつた。

五時頃、太陽は沈み初めた。私は、その夜を過ごす場所を探しだした。そして右側の方に、殆んど平坦な、羊齒、野生のバナナ、ブウラオ、そんな樹々の密生した百米平方程の土地を見つけた。また、よく熟れたバナナのなつてゐるのも見つけた。私は急いで薪を集め、バナナを燒いて食事にした。それから、漸くの事で私は、枝の上にバナナの葉を組み合はせて雨の用意に備へ、その樹の根下に寢ころんだ。

寒い夜だつた。水の中を歩いて來た爲に、變に惡感がしてならなかつた。そしてちつと

もよくは眠れなかつた。私は、野蠻な怪物が現れて、私の足でも嚙みつきやしないか・そんな心配から、斧の柄をしつかり握つてゐた。夜は更けて行く。あたりに何も見えない闇の夜に、私の頭近く、燐光の粉のやうに光るものがあつた。私は變に思つた。そして、マオリイの人達の話してくれた、「テュパポオ」に就いての話を思ひ出して微笑んだ。この惡魔の精は、夜と共に起き出でて、眠れる人々を惱ますと言ふ。その惡魔達は、山の心にゐて、深く森がその闇の世界を被つてゐる。それ等は、其處に蔓つて、あらゆる死者の精靈は、その親内の人々を荒らしに來るのだと言ふ。——惡魔の跋扈するこの現世にゐて、危險な生活を送つてゐる生ある者の不幸さよ！而かも、私もその思慮のない人間の一人であつた。——こんな風に、私の夢はとかく亂れがちだつた。

間もなく私は、この燐光の粉が、さつき私の燃やしたやうな、濕つた土地の枯枝に生へる特種な菌から出てゐる事がわかつた。

翌日の夜明方、私はまた路を續けた。

行くにつれて、川は次第に變化多くなり、小川、急流、瀧、それらがこんがらがつてゐる

た。度々私は路に迷つた。そして、路を續ける爲に、枝から枝にぶらさがりながら、殆んど足の地につかないやうな事が度々あつた。

水底には、驚く程大きな蝲蛄（ざりがに）が、私をぢつと見凝めてゐた。そして、お前は一體何をしに來たんだ？そんな事を言つてゐるやうに思はれた。また、百年を經たかと思はれるやうな鰻が、私の近くを逃げて行つたりした。

それから、角を曲ると、突然私は、岩壁に一人の若い裸體の娘の立つてゐるのを見つけた。それは、二の腕で、岩にくつついてゐると言ふより、岩肌を撫でてゐるやうな樣子だつた。その娘は、高い石の間から湧き出る泉の水を飲んでゐるやうだつた。飲み終ると、彼女は、その兩手に水を湛へ、それをその胸に注ぎかけた。それから――私は、何の物音も立てなかつたのだが――まるで小心な羚羊（かもしか）が、本能的に他人を見つけ出すやうに、彼女は私の隠れてゐた繁みの方に、そのぐるぐる巻にした頭を傾けた。然し、私の眼は、彼女の眼にぶつつかりはしなかつた。だが、私が彼女を見るとすぐ、女は、こんなことを叫び乍ら水中に飛び込んで了つた。

「ひどい人！」

勿論私は、急いで水中を見廻はした。——誰もゐない。ただ、底の小さな礫の間に大きな鰻が蜒つてゐるだけだつた。

困難や疲勞と戰ひながら、漸く私は、「島」の頂、怖れられたる山アロライのつい近くに着いた。夜で、月が高く登つてゐた。私は、月を見ながら、ある神々しい會話を思ひ出した。その會話は、その背景としてきつとかうした場所をとるだらうと思つた。

「ヒナ（月の神）がテフアテウ（地球の神）に言つた。

『人間の死んだ時には、また甦らしてやつて下さい』

地球の神は、月の女神に答へた。

『いやだ。俺は、決して甦らせてはやらない。

人間も、植物も、それらを養つてゐるものも皆同じやうに死んで行くのだ。土も死んで、その終りが來るであらう。それは、もう永遠に甦つて來る事はないだらう』

ヒナは答へた。

『おすきなやうになさいまし。私だけは、また「月」を甦らせてやりませう』

そして、ヒナの所有するものは生き續け、テファアテウの所有するものは滅亡した。そして、人間も亦、死なねばならなかつた」







第三章

暫く前から私は、何となく元氣がなくなつて了つた。その爲に仕事もうまく運ばなかつた。下畫が澤山欠けてゐた爲でもある。然し、享樂が欠けてゐたのが、その主なる原因であつた。

チチを、パペエテに送り返してから、もう數ケ月は經つた。その間、私は、あの絕えず同じやうな事ばかりを尋ねて、子供らしく饒舌つてゐた聲を耳にしないのだ。私は、いつも同じ話を同じやうに

話してやつてゐた。それでもよかつた。だから、今のこの沈默が、私にはいけないのだ。

私は、この島を廻つて、何時とは日を定めない浪々の旅に出ようと決心した。

そして、その旅に入用の簡單なカバンを用意し、習作を揃へたりしてゐた。すると、隣の家主アナニイが、心配さうな顔をして見に來た。彼は、私がもう歸つて來ないで行つて了ふんぢやないか、そんな事を尋ねた。私は、さうぢやない、只しばらく旅行をしてくるだけだ、さうしてまた歸つて來るのだ、そんな風に言つて聞かせた。然し、彼は私を信じなかつた。そして泣き出した。殊に、その細君も彼と一緒になつて、彼女が私を愛してゐる事、彼女達の間に暮すのに金のいらない事などを言ひ立てた。そして、何時かは、此の土地で永久に眠る事も出來るやうになるのだと言つて、その小舍の傍にある細い木で圍まれた土地を見せたりした……

勿論私は、永遠にこの土地の土になりたいと思つてゐた。少なくとも、永遠に私を誰一人私を搔き亂しに來ないであらう土地だから……

「あなた方歐羅巴人は」とアナニィの細君はつけ加へた。「いつでも、ずつと此處に暮し

てゐるのだと約束はする。だのに、皆があなた方を愛するやうになると、きまつたやうに、此處から去つて了ふ！あなたは、また歸つて來るとはつきり仰しやるけれど、もうきつと永遠に歸つて來られないのだらうと思ふ」

「そんなに言ふんだつたら、僕は誓つても好い、僕の計畫では、暫くの間旅行をして來るだけなんだから。暫くしたら、暫くしたらね、またきつと歸つて來るよ」（私は虚言は吐けなかつた）

そして、到頭私は出發した。

海沿ひの路から外れて、私は、山の奥深く擴がつてゐる密林を横ぎる狹い小徑に入つて行つた。そして、小さな谷間に着いた。其處には、古代マオリイそのまゝの風俗をした土人が住んでゐた。彼等は、幸福で平和だ。彼等は夢み、愛し、眠り、唄ひ、そして祈る。私は、其處には、もうなくなつてゐたが、彼等の女性の神靈、ヒナの像を、はつきり見るやうな氣がした。そして、月の女神を祀る祭典を見るやうな氣がした。たゞ一基ある偶像は、兩肩の巾十歩に餘り、高さ四十歩もあつた。その頭には、頭巾のやうな大きな赤色を

帶びた石が乘つてゐる。それを取り卷いて、彼等土人達は、往古の祭典マタムアに從つて、踊り廻る。そのヴィヴォは、だんだん時の經つにつれて、或は明るく或は輕く、或は憂欝にまた暗く、その調子が變つて行く。

私は、路を續ける。

島の頂、歐羅巴人の殆んど來た事のないタラヴアオでは、一人の憲兵が、私にその馬を貸してくれた。私は、それに乘つて、その坂道を眞直に進んだ。

イチア邊に續く小區フアオヌでは、私は、一人の土人に問ひかけられた。

「へえ！人間を作る人間なのか。（彼は、私が畫家だといふ事を知つてゐたのだ）おいで、一緒にめしを食はう」彼は、客あしらひの好いタヒチ人らしい態度で言つた。

私は、ちつとも遠慮はしなかつた。招いてくれる人の微笑が、私の心を惹いた、そして、氣持がよかつた。私は馬を下りた。彼は、何の屈從的な樣子もなく單純にその馬をとつて、上手に枝へ繫いだ。それから私達二人は小舍の中に這入つて行つた。中には、男女や子供が、土の上に坐つて、話し合つたり煙草を喫したりしてゐた。

「何處へ行くのか？」四十位の綺麗なマオリイ女が訊いた。

「イチアへ行く」

「何をしに？」

どんな事を考へたのかよくわからなかつたが、私は、私の祕そかな、然し、眞の旅行の目的を打ち開けて了つた。

「女を一人見つけたいと思つて來た」

「イチアには、可愛いゝ女が澤山ゐる。一人で好いのか？」

「さうだ」

「若し欲しいのなら、一人お前さんにあげよう。それは私の娘だ」

「若いひとか？」

「さうだ」

「その人は、丈夫なひとか？」

「うん」

「ぢや好い、呼んで來てくれ」

その女は立ち去つた。

そして、十五分もすると、彼女は、野生のバナナ、蝦、魚、そんなマオリイの食事を持つて、後に脊の高い若い娘を連れて這入つて來た。その娘は、手に小さな包を持つてゐた。ひどく透き通るバラ色の寒紵紗の下から、肩や腕の金色の肌が見えてゐた。そして、二つの乳房がその胸にぷつくり膨れ上つて見えた。この可愛いゝ顏は、私の今迄この島で見た顏とは、少し違つてゐた。その髪は、並はづれて綺麗で、まるで茨のやうに生え、輕く縮れてゐた。これらの樣子が、太陽の光に輝いて、まるでクロームの偶像のやうだつた。

間もなく私は、この娘が、トンガス族の生れだと知つた。

私は、娘が私の傍に坐つた時、少しものを尋ねてみた。

「僕が怖くはないか？」

「いゝえ」

「ずつと、僕の小舍にゐても好いか？」

「えゝ」

「ちつとも『病氣』に罹つた事はないか？」

「いゝえ」

これだけだ。この無表情な若い娘が、私の前の土の上で、私に出された食事をバナナの大きな葉の上に乘せてゐる間、私の心は波うつてゐた。食事はうまかつた。然し、私は、すつかり心を奪はれて了つて、變に憶病になつてゐた。この凡そ十三位（然し土人は早熟だ）の子供つぽい娘は、私の心を魅すると同時に、變に恐怖の念を抱かせた。この心は、一體何を考へたのだらうか？而かも、こんなに早く受け入れられ決定された契約に捺印するのを躊躇したのは、この彼女にとつては餘りに老ひすぎてゐる私なのだ。——私は、恐らく母親がこの娘に命令して强要したものだらうと思つた。或は、彼女達の間に取り交はされる單なる取引きに過ぎないのだらうか……然しいづれにしても、私はこの大きな女の子の裡に、この人種獨特の獨立性と尊大な處のあるのをはつきり感じた。

殊に、この娘が、少女達には共通な、高尙なやさしい動作のあらはれて來る淸澄さを、

無意識の中に持つてゐる事だけはたしかだつた。然し、最初は善良な而かも感覺的だと思はれた口もとの嘲るやうな小皺は、、危險が私に迫つてゐて、彼女には何でもないのだ、そんな事を告げてゐるやうな氣がした……

私は、その小舍の戶口を出ながら、變な心配、胸を刺すやうな眞の恐怖に襲はれた事は事實だつた。

私は、馬を解いて乘つた。若い娘は、私の後からついて來た。彼女の母親と一人の男と、二人の若い女——それはその娘の叔母だと言ふ——そんな人々も一緒だつた。

私達は、ファオヌから九粁程あるタラヴァオに歸つて來た。

其處に入つて行くとすぐ、此處で停れと皆は言つた。私は馬を下りた。そして、私達は、大きな綺麗に纒まつたむしろ豐かな小舍の中へ入つて行つた。それは、勿論自然物から來た豐かさだつた。乾草の上には綺麗な筵が敷いてあつた、その上には、まだ若いひどく人の好ささうな夫婦が坐つてゐた。私の許婚の女は、その女の傍に坐つて、私を紹介した。

「これが、お母さん」

そのまゝ沈默が續いた。それから、新鮮な水を杯に汲んで、私達は順々に飮んだ。これは、この種族の宗教的儀式らしい。それがすむと、母だと言ふ女が、悲しさうに、眼瞼を潤ませ乍ら言つた。

「お前は好い人か？」

私は、まづ自分の良心をぢつと吟味してから、何のこだはりもなしに答へた。

「さうだ」

「あたしの娘を、仕合せにしてくれるのだね」

「さうだ」

「これから八日して、もう一度この子は歸つて來なければならない。其の時、若しもこの子が不仕合はせな樣子だつたら、もうお前の處へは歸さないから」

長い沈默が續いた。それから私達は其處を立つた。そして、また馬に跨り、ずつと連れ立つて出立した。

その路で、私達は澤山の人々に會つた。その人達は、私の新しい妻を識つてゐた。彼等

は挨拶しながら言つた。

「まあ、まあ！お前はフランス人のお嫁さんになつたのか？仕合はせでね、好い運が開けるやうにね――」彼等の眼には、何とはなしに懸念の色が浮んでゐた。

或る事が私の氣になつた。――それは、如何してテフラ（私の妻をさう呼ぶ）に二人の母親があるのだらうかと言ふ事だ。だから私は、テフラをくれた最初の母親に訊いて見た。

「どうして、嘘言を言つたのだ？」

テフラの母親は答へた。

「あの人も、やはりあれの母親だ、あれを育てゝくれた養ひ親だ」

私は路を進め乍らずつと夢のやうな思ひでゐた。馬は少し弱つて來て、危なつかしくなつて來た。そして、大きな石に躓いたりする。

タラヴァオで私は、馬を憲兵に返した。その細君は、悪意は持つてゐないが、ちつともやさしみのないフランス女であつた。

「まあ！こんなきたない女を連れていらつしやるの？」

そして、その憎惡に滿ちたやうな眼つきで、この若い娘をぢろぢろ見まはした。然しこの娘は、かうした仕打ちに對しても、つんと冷たく高慢さうに澄まし込んでゐた。この時私は、この二人の女の見せてくれる象徴的な場面をぢつと見凝めてゐた。——これは、凋落と青春の對照であつた、法律と信仰、不自然と自然の對照であつた。而かもこの前者の上には、虚僞と邪念の不純な氣分が喘いでゐるやうだつた。

同時にこれは、現代に於ける兩種族の對照でもあつた。私は、自分の民族を辱かしく思つた。まるで、どす黑い煙のやうな雲が、綺麗に澄んだ空を穢がしてゐるやうな氣がした。私は、私の旣に愛してゐるこの活々した金色の輝きをした女の方へ、心を安め慰めるやうに眼を向けた。

家族達とは、タラヴオの支那人の雜貨屋、何でも賣つてゐる、人間でも動物でも賣つてゐる家で別れた。

私達二人は、マタイアにある私の小舍迄、乘合馬車に乘つて歸つて行つた。

私の妻は、餘りお饒舌りはせず、憂鬱で人を嘲るやうなところがあつた。

* * *

私達は、絶えずお互に觀察し合つた。私には、まだどうもよくわからない處があつた。然し私は、この爭ひにすつかり敗けて了つた。私は、努めて鋭い觀察者になつてゐようと決心してゐたが駄目だつた。私の神經は、もうこの眞面目な決心に耐えられなくなつて了つた。そして、暫くすると私は、テフラに對して、何もかも打ち解けて了つた。

私は、苦い經驗や、また私本來の性質によつて——ラテン系の人間の心、殊にフランス人の心と、オセアニア人の心との間にある根本的な差異を知つた。マオリイ人の心は、すぐに打ち解けて來るやうな事がない。その心を得る爲には、長い辛棒と研究とが必要だ。その心は、最初諸君には隱れてゐる。そして、笑ひや變り易い態度で、諸君を狼狽させる。だから、その外觀だけを見て、彼女達の芝居をやつてゐる事も考へずに、それが心の底か

らの眞實の現れだなど〻思つてゐると、その間に、彼女達は、靜かに落ついて、氣樂さうな笑ひで、またその子供つぽい輕卒さで、諸君を檢査してゐるのだ。

一週間は過ぎた。その間私は、自分にもわからないやうな「子供」になつて了つてゐた。私はテフラを愛した。そして、その事を彼女に言つても見た。彼女は、微笑んでゐた。――彼女は、もうよくそんな事を知つてゐたんだ！またちつとも口には出さなかつたが、彼女も私を愛してゐるやうだつた。而かも、時々、夜の光が、テフラの金色の肌の上を縱橫に流れてゐるやうな時……

八日目になると――その日私は、初めて同じ小舍に一緒に入つて來たやうな氣がした。テフラは、約束通り、フアォヌの母親に會ひに行きたいと言ひ出した。私は、心寂しく、それを許す外なかつた。私は、旅の費用と、父親にラム酒を買つて歸つてやるやうに、そのハンケチに金を入れて結んでやつた。そして、乘合馬車の處まで連れて行つた。

私には、これが永久の別れのやうに思はれた。――また歸つて來るだらうか？

私は、小舍にゐても寂しくつてやりきれなく、ぢつとしてゐられなかつた。殊に、ぢつ

と仕事の事などに思ひをひそめる事は出來なかつた……

然し、數日すると、彼女はまた歸つて來た。

＊
＊　＊

そこで非常に幸福な生活が初まつた。明日の日を思ひわづらう事もなく、お互の信頼の上に、お互の強い戀の上に。

私はまた仕事を始めた。幸福が、私の小舍一ぱいに溢れてゐた。——それは、太陽と共に現はれ、同じやうに輝いてゐた。テフラの金色の顏は、小舍の中や周圍の景物を、喜びと輝きで滿たしてゐるやうだつた。而かも私達二人は、共に全く單純だつたのだ！天氣の好い朝は、まるで、天國のアダムとイヴのやうに、二人は一緒に近くの川の水を浴びに行つた。

タヒチの天國、nave nave fenua（心よき土地）……

而かもこの天國のイヴは、段々素直に愛らしくなつて來た。私は、彼女から立ちのぼるノアノアの香を嗅ぐ！彼女は、私の生活の恰度好い時に這入つて來たのだ。――もつと早かつたら、私は多分彼女を理解する事が出來なかつたらうと思ふ。また、もつと晩く來たのだつたら、それは餘りに晩すぎたに違ひない。今、私は、彼女を愛すると同時に理解する。そして、彼女のお蔭で、今迄ぴつたりしなかつた神祕な處までも入り込んで行ける。然し時々は、私の知識で判斷出來ないやうな事、私の記憶に當て嵌められないやうな事があつた。然し私は、テフラの言ふ事はすべて感情で理解した。殊に彼女の言葉で、他日思ひ出すのは、私の感覺と感情に映つた言葉のみであつた。彼女は、日々の生活の間に、その民族を完全に理解するやうに導いてくれた。それは、外の如何なる方法を以てしても、うまく行かないものだと思はれる。私は、時間を超越し、幸不幸を考へなくなつてゐた。幸福は、その觀念をなくして了つた時に滿ち溢れて來るものだ。そして、總てが美しい時、總ては善だ。

テフラは、私の仕事や夢想の邪魔は少しもしなかつた。そんな時には、彼女は本能的に默つてゐる。そして、ものを言つても、私の邪魔にならないやうな時をよく知つてゐる。その時私達は、歐羅巴の事、「神」や神々の事などを、お互に話し合つた。私は彼女を教育し、また彼女は私に色々の事を教へてくれるのだつた。

*
* *

或る日、私はパペエテに行かねばならなかつた。私は、夕方には歸つて來る、さう約束して小舍を出た。然し、私の乘つた馬車は、その道の半分位しか行かなかつた。その先は、歩かねばならなくなつた。そして、小舍に歸つたのは、朝の一時頃だつた。

恰度その頃、私の小舍には、燈火をつけるものが少なくなつてゐた。私は、それを買ふ爲に出かけてゐたのだ……

戸を開くと、もうランプは消えて部屋は眞暗だつた。突然私は、心配に襲はれた。――きつと小鳥は逃げ去つて了つた、さう思つたのだ。私は急いで燐寸を磨つた。そしてあたりを見廻はした……

テフラは、裸のまゝで、ぢつと床の上に俯きに倒れて動かない。その眼は恐怖に大きく見開かれたまゝだ。そして、私をぢつと見凝めてゐる。然し、私がよくわからないやうだつた。私は、暫く變な不氣味な氣持で立つてゐた。テフラの恐怖が、私にも傳つて來るやうだつた。そして、そのぢつと見凝めた眼から、燐の仄めきが流れ出て來るやうな氣がした。然し私は、テフラのこんなに美しい事を見た事がなかつた。殊に、こんなに痛ましい美を見た事がなかつた。私はこんな薄暗がりの中には、不氣味な妖怪や、怪しい幻影が一ぱい滿ち滿ちてゐる事だらうと考へた。だから、子供の恐ろしい發作を引き起すやうな態度を取らないやうに注意した。而かも、こんな時には、私だつて何か變なものに見えないとは限らないではないか？若し彼女が、私の心配さうな顔を見て、惡魔か幽靈か、それとも、夜をかけて滿ちてゐると言ふこの種族の物語りにあるテュパポオとでも取るかも知れ

ないではないか？私自身さへも、彼女が其處にゐるのかどうだか、はつきりわかつてゐたらうか？かうした肉體的にも精神的にも迷信のある土地で、彼女を領してゐる烈しい恐怖の感情は、彼女をすつかり別な人間のやうに變へてゐた。そして、今迄見たあらゆる樣子とは、すつかり違つて見えた。

間もなく彼女は、我に歸つた。私は、彼女の意識を明瞭にし、私への信賴の氣持を取り戾すやうに努めた。彼女は、不滿さうな樣子で私の言ふ事を聞いてゐた。それから歔欷き乍ら顫へ聲で、

「もう、こんな眞暗な中に放つとくのはいや」と言つた。

然し、心配が消えると、すぐに嫉妬が生れて來た。

「町で何をしてゐたの？踊つたり飮んだりして、誰にでも、水兵や士官に身をまかす女のゐるあの市場へ行つたのだらう……」

私は、この爭ひは柳に風と受け流した。その夜は氣持の好い夜だつた。氣持の好い、燃えるやうな、熱帶的な夜だつた。

テフラは、時には非常に聰明で、可愛くなつた。然し時には、ひどく馬鹿で輕佻になる事があつた。全然異なつた二人の人間が、彼女の中にゐるやうだつた。そして、それが非常な速さで、次ぎ次ぎに變つて行つた。然し、それは、彼女が移り氣な女だつたからではない。只彼女は、「古き」種族の子として、二重の性格を持つてゐただけだ。

或る日、永遠のユダヤ行商人が――これは、大陸を荒すと同じやうに、海を越へてまでも荒しに來る人間だ――渡金した寶物の箱を持つてこの地方へやつて來た。彼は、その商品を並べ、人々はその周圍に集つた。その中の、一對の耳輪が、人々の手から手に渡つて行つた。皆の眼は輝き、總ての女は、それを欲しがつた。

テフラは、眉を顰めて私を見凝めた。彼女もそれを欲しがつてゐるのだ。その眼が、はつきりそれを告げてゐる。然し、私は知らない顏をしてゐた。

するとと彼女は、私を隅の方に引張つて行つて、

「あれが欲しい」と言つた。

私は、フランスでは、あんなばかなものは二フランもしないと言ふ事、あれは銅なのだと言ふ事などを言つて聞かせた。

「あれが欲しい」

「だめだよ、あんな穢いものに二十フランも拂ふなんて、ばかばかしいぢやないか！　いけないよ！」

「あれが、欲しいんだ」

そして、熱心にべらべら饒舌つた。その眼は、涙で一ぱいだ。

「まあ！あなたは、あの耳輪が、ほかの女の人の耳に着けられても辱かしくないの？　もう誰だか、女にあれを買つてやるのに、馬を賣ると言つてゐる」

私は、もうこの馬鹿さ加減には我慢が出來なかつた。私は、ひどく叱つた。

ヲフラは、すつかりしよげて、まだ私を見凝めてゐる。そして、もう何も言はずに泣い

てゐる。
仕方がない、私は其處を離れて、ユダヤ人に二十フラン拂つてそれを買つて來た。——御機嫌はすつかり直つて了つた。
それから二日目は日曜だつた。テフラは、すばらしくお化粧をした。シャボンで洗つた髪の毛を太陽に乾かし、香の高い香油を摩り込んだ。そして、着物を着、手には我々西洋人風のハンカチーフを持ち、耳には花を差した。然し、跣足だ。彼女は、すぐに歌ふ聖詩を繰り返しながらお寺へ出て行く。私は、
「あの耳輪は、どうしたの?」と訊いてみた。
テフラは、輕蔑するやうに脣を尖がらして、
「あれは銅だ、Aita Piro, Pirupiru」
そして、大聲で笑ひ乍ら小舍の戸口を出、また小むづかしい顏をして寺の方に行つた。
晝寢の時には、着物を脱ぎ、すつかり裸で、私達はいつものやうに並んで眠た。そして、夢を見た。——大方、テフラは、その夢の中で他の耳輪の輝いてゐるのを見ただらう。私

は、私の知つてゐる事すべてを忘却し、ずつと眠つてゐたいと思つた……

* * *

マタイアで、盛大な結婚式があつた。それは、海外布教師が、改宗したタヒチ人に强制する結婚式だつた。

その式に招待されて、私はテフラと一緒に行つた。

その式の重なるものは食事であつた。習慣として、かうした儀式には、最も贅澤な料理を並べ立てる事になつてゐた。タロ、魚、野生のバナナ、丸ごと暑い石の上で燒いた豚の肉、そんなものが山と積まれた……招待された人々の圍んでゐるテイブルは、急作りの屋根の下に置かれてゐた。そして、それは、木の葉と花で綺麗に飾られてゐた。

其處には、兩方の親戚や友達が、全部列席してゐるのだつた。

この結婚は、殆んど白人と言つて好い若き娘――これは土地の小學校の教員――と、プナアニアの酋長の息子である純粹のマオリイ人とのめあはされたものだつた。娘は、パペエテの宗教學校を卒業して、彼女を可愛がつてゐた新教の僧侶が、かなり急にこの結婚を強制したのだと言ふ噂だつた。無理もない、この土地では、宣教師の欲する事は、神の欲し給ふ事なのだから。

皆は、よく飲みよく食つた。そして、一時間程すると、演說が初まつた。それは澤山で、皆規則や順序を踏んだものだつた。まるで不思議な卽席の雄辯競爭のやうなものだつた。

それから、重大な問題が起つて來た。それは、この新しい夫婦に、二家族の中の何れの姓を與へるかと言ふ事だ。この古くから傳はる國家的習慣は、重大な且羨望に近いやうな特權を持つてゐたのだ。この問題に關する議論から、戰爭の惹き起された事も稀ではなかつた。

然し、この日は、何事も起らなかつた。總てみな氣持よく運んで行つた。並ゐる人々は皆親しく喜ばしく――そして、皆かなり醉つてゐた。私の可愛いゝ女も、近所の人々に引

つぱられて（私は彼女の番をしてゐなかつたのだ）ひどく醉つぱらつて其處を出たのだつた。何と言ふ事だ！私は、彼女を小舍に連れて歸へるのに隨分苦勞したものだ。女は、ひどく愉快さうだが、またひどくだるさうでもあつた！

卓子の中央には、すばらしく威嚴を保つたプナァニアの酋長の細君が坐つてゐた。その奇怪な立派なオレンヂ色の着物は、大市場にあらはれる女王のやうな大げさな態度を見せてゐた。然し、その種族の先天的な優し味と、その階級的な意識とが、この大げさな金襴疑ひのきらびやかさに、何と言つて好いか、ともかくある偉大さを添へてゐた。そして、このタヒチ獨特の祭典に於て、彼女は、料理から來る香氣や、島の花の香に、尙一層强い香氣を添へてゐるやうに見えた。これこそノアノアだ！

彼女の傍には恐ろしく老衰した百歲に餘る祖母が坐つてゐた。その完全に並んだ食人齒は、一層その老婆を恐ろしく見せてゐた。彼女は、周圍の人々のしてゐる事には、何の興味もなささうだつた。ぢつとして、まるで嚴肅な木乃伊のやうだつた。然し、その頰に殘された、今ではもう形もはつきりしないやうな暗色の文身は、何だかラテン文字のやうで、

彼女の代りに私に話しかけるやうに思はれてならなかつた。

私は、前から、此處で多くの文身を見た事がある。然し、何れも皆その文字を判讀する事が出來なかつた。然し、それは確かに歐羅巴語だ。その昔、宣敎師達は、逸樂に對して非常な嚴罰を加へた。そして、侮辱のしるしとして、ある女達に、醜行の記號、地獄へ落ちる豫定の記號を彫みつけたのである。——それは、犯罪ばかりでなく、馬鹿げた事、恥かしい事にも、破戒のしるしとして彫みつけられるのだつた。私は、歐羅巴人に對するマオリイ人の不信用が、オセアニア人の寛大な處置に依つて少しは和らげられはしたものゝ、今も尙嚴存してゐる理由が、はつきりわかつた。牧師の爲に文身をされた祖先の時代と、牧師に依つて結婚させられる娘の現在との間に、幾年の歲月が流れ去つた事だらう！而かもその烙印は、今尙醜行の二重の證左として我々に殘されてゐる。それに忍從して來た種族と、殊に疑ひもなくそれを科して來た種族との……

それから五ケ月もすると、若い妻はよく似た男の子を生んだ。兩親はひどく怒つて離婚を要求した。然し、青年は、それに同意しなかつた。

「僕達が愛し合つてゐる以上、そんな事がなんとあらう？我々は、習慣として、他人の子供を養子にするではないか？僕はこの子を養子として貰ひ受ける」

然しこの話の中に、只一つ疑問が殘る。それは、あのゴオル人の優れた首領として有名だつた牧師が、何故あのやうに、結婚の法律上宗教上の儀式を急いでやつたのだらうか？と言ふ事だ。口の悪い人々は、色々の事を言ひふらした……さうだ！悪口を叩かない人間があるだらうか？御告の天使さへも、この謎のやうな言葉を知つてゐたではないか……

そして、こんな事が、何にならう！


OYEZ AMOUREUSES
VOUS SEREZ HEUREUSES



第四章

夜になると私達は、寝床で色々の長い、また時には眞面目な話をした。私は、この子供のやうな魂の中に、既に社會的には死んで了つた遙かに遠い過去の趾を探し求めた。私の質問には順々に答へる。かうした話は、我々の文明に惑溺し、侵略に服從して了つてゐるやうな人々には、すつかり忘れられて了つてゐるに違ひない。然し、昔の神々は、女達の記憶の中に、祕そかにしまはれてゐる。テフ

ラは、私に、驚くべき奇異な話をしてくれた。だから私は、新教の宣教師達がすつかり覆うて了つたと信じてゐる幕の下から、やはりこの女達の國民の神々が芽をふき出してゐるのがわかつて來た。要するに、宣教師達の仕事は非常に淺薄だ。彼等の教訓は、まるで漆塗りの弱いベッドのやうなものだ。それはすぐ禿げて、少しの損傷にもすぐ毀れて了ふ。テフラは、規則正しく寺に行く。そして、正式の宗教を表面上はしつかり守つてゐるやうだ。然し、心の中では、マオリイのオリムプの神々の名を稱へてゐるのだ。彼女は、その神々が如何にしてこの世界を創つたか、その神々が如何に尊敬されるべきものだかと言ふ事を知つてゐる。そして、嚴重な基督教道德に就いてはさつぱり知らない。それよりもむしろ注意しなかつたと言ふ方が好いかも知れない。だから、男と結婚して、自由な生活を送る事に何の後悔も感じてゐなかつた。私は、彼女が、タアオラとキリストとの信仰の間に、どんな結合點を作つてゐるのかよくわからなかつた。私には、彼女が、その二つ共に信仰してゐるやうに見えた。

ふとした事から彼女は、私にタヒチの神學をすつかり話してくれた。私は、歐羅巴風の

知識を以て、自然現象を說明してやらうと努めた。

星の話が一番彼女の興味をひいた。彼女は、朝の星、夕の星を、フランスではどう呼ぶのだらう、そんな事をたづねた。然し、地球が太陽の周圍を囘轉するのだと言ふ事だけは、どうしてもわからないやうだつた。

また彼女は、その國語で星の名を敎へてくれた。それを聞き乍ら、私は、神々しい星の輝きの中に、土地と空を司どる雄大にして崇高な主達を見るやうな氣がした。

タヒチの土人達は、太古時代から、星に對して非常に廣汎な知識を持つてゐたやうだ。また話す折もあらうと思ふが、前から島々を治めてゐた祕密結社をなすアレオイ人の定期の祭典は、星の發展に依つて定められてゐた。マオリイ人は、月光の差す本體を知つてゐるやうだつた。彼等は、月は地球と同じやうな圓球だと想像してゐた。そして、地球と似た產物を豐富に產出し、同じやうに人間が住んでゐると思つてゐた。そして、次のやうな彼等らしい傳說を以て、月と地球の距離を見積もつてゐた――

オラ樹の芽が、白鳥に依つて、月から地球へ運ばれた。そして、衞星に到着するのに二

ケ月を要し、また二ケ月を經て地球へ落ちて來た。その時その白鳥の翼は、すつかり磨り切れてゐた。この鳥は、マオリィ人の知つてゐる鳥の中で最も速く飛ぶ鳥なのだ――

今此處に、星をタヒチ語で書いた人がゐる。それは、昔の領事、モランフウだ。その蒐集にかゝる書物を借りて、私は、テフラの教へてくれた話を完成したいと思ふ。私がその書を得たのは、タヒチへの移住者グウピイル氏の好意のお蔭である。

その書は、單なる空想のたはむれと言ふよりは、星座學の組織的な規則的草案と見る方が正しいとさへ思はれる書だ。

――ルウア(その太初は偉大である)は、その妻、暗黑の「土」とねた。そこから「土」が生れ、「黃昏」が生れ、「暗黑」が生れた。そこでルウアはその妻を去らしめた。

――ルウア(その太初は偉大である)は、「大聯盟」と呼ばれる妻とねた。そこから「星」が生れ、ファイチィ星、宵の金星が生れた。

金色の空の唯一人の王は、その妻ファヌウィとねた。そこから、トオルウア星、宵の明星、朝の金星が生れた。トオルウア星は、晝夜日月星を統べ、航海者の道しるべとなるも

のだ。その星が北に向つて斜に進んで、その妻と眠り、赤星を生んだ。それは夕方二つの面の下に輝いてゐる……

赤星は、西方に飛んで、空に向つて航行する輝く日の獨木舟を用意した。そして、日の出と共に空に飛び上つて行つた。

レフウアは、廣大な土地に進んだ。そして、その妻ウウラ・タネイパとねた。そこから、プレイアード星座に向ひ合つて、雙女宮の王達が生れた。

この雙女宮は、確かに我々の言ふカストオルとポルユツクスと同じだ。彼等の由來は面白い。

彼等はボラ・ボラにゐた。然し、その兩親が、彼等二人を別れ別れにすると言ふ話を聞いて、その父の家を去つて了つた。そして、共に、リアテアに、それから、ウーハメに、エイモオに、オタイチに行つた。彼等の母は、その出奔を思ひ病つて、すぐに彼等を探し初めた。然し母親は、いつもその島々に來るのが晩すぎた。だが、漸くオタイチで、彼等の逃亡の先き廻りをする事が出來た。そして、彼等が山に隱れてゐる事を知つて、その山

で見つけた。彼等は、母親の前を、アロライの頂の方迄も逃げ延びて行つた。母親は、涙にぬれ乍らも其處で捕へ得るものと信じてゐた。然し彼等は、そのまゝ空高く飛んで行つた。そして、今も尙彼等は、星座の間にその形を止めてゐる。

赤星は、疑ひもなく我々の言ふ二つの面の下に輝く射手座(サヂテイル)である。古代人は、往々さうした光景の下にこの星を描いてゐる。

尙テフラは、綿雲の中から現はれるアトウアヘイと呼ばれる星の話をしてくれた。それは、我々の言ふ明星だ。

彼女は、この地方に度々ある流星が、テユパボウであり、不幸な放逐された天才で、彼等は靜かに憂鬱に他の國を求めながら、「大きな谷」を横切つて行くのだと言つてきかなかつた。

* * *

「空と地球は誰がつくつたのだ？」
モランフウ氏とテフラが、これに答へてくれる。
——地球、空、人間、それ等よりも以前に、タアオラと呼ばれるものが空間にゐた。タアオラは聲をあげて呼んだ。然し何も答へなかつた。彼は只一つの生物であつた。そこで彼は自ら「宇宙」に變化した。
總ての本源はタアオラだ。これは、換言すれば、彼は自分自身をさう呼んだと言つても好い。岩石もタアオラだ。砂もタアオラだ。
タアオラは、光明であり萠芽であり根本である。——宇宙は、單にタアオラの殼に過ぎない。彼は、總てを動かし、宇宙の調和を計るのである。
「汝！本源よ、汝！我等は岩石なり、我等は砂なり、來つて地球を構成すべし」
そこで彼は、岩石と砂とをその手の中に長い間壓へつけた。然し、そんな事をしてゐても、この二つの物質は決して融合しない。だから彼は、世界の根本を作る爲に、その右手で七つの空を投げた。そして、光明が創造された。それから、あらゆるものが起つて來る。

宇宙はこれらの奥深く迄輝き渡り、「神」は、無限にみとれて恍惚としてゐる。
宇宙はこれらの奥深く輝き渡り、「神」は、無限にみとれてゐる。
無にして停滯せる狀態は過ぎて、生と死が現はれた。
言葉は、その言葉の作品を作り、使者は、その使命を果した。本源は確定した。砂や岩石は、それぞれその適所に落ちついた。空は高く晴れ上り廻轉する。そして海はその深淵を滿たす。
——宇宙成る。
この創生期の太初に關する說は、種々あつて混亂してゐる。然し、それらは種々敷衍されたものにすぎないだらう。——例へば、
タアオラは、「外界」(或は海)の女王と呼ばれる女とねた。そこから雨、黑雲、白雲が生れた。
タアオラは、「內界」(或は陸)の女王と呼ばれる女とねた。そこから最初の萠芽が生れた。やがて、地球の表面に殖えて行く諸々のものが生れ、それから、山々の霧が生えた。

それから强者と呼ばれるものが生れ、美、卽喜ばす爲の裝飾が生れた。

地球創造に關して、これと異つた說がある。

マアフウイ――これは少しタアオラや、星を創造したルウアとこんがらがつてゐるやうだが――マアフウイは、その獨木舟を浮べる。そして彼は、その舟底に坐つてゐる。馬の毛の絲の先についた釣針が、船の右側から垂れる。彼は、その絲を手に持ち、偉大なる魚(地球)を釣る爲に、その針を宇宙の底深く投げ込む。

釣針は喰ひ入る。そして、根底(諸々の本源)が見え、神は世界の偉大なる重量を感じる。

テフアトウ(地球)は釣針に掛つて、倘無限の前に懸り乍ら夜から浮び上つて來る。マアフウイは、空間に浮んで、今はその意志に從つて動かす事の出來る偉大なる魚を釣つた。

そして彼がそれをその掌中に持つてゐる。

その他マアフウイは、晝夜の時間が同じく續いて行くやうに太陽の運行を司どる。

また私は、テフラに、マオリイの「神々」の名を數へてくれるやうに言つた。

タアオラは大氣の女神オヒナとねた。そこから「虹」、「月光」が生れ、それから赤雲赤雨が生れた。

タアオラは地底の女神オヒナとねた。そこから、地球を生かし、地下から發する騷音に依つてその存在のわかる天才テフアアトウが生れた。

タアオラは、「地球以外」と呼ばれる女と寢た。

そこからテイリイとラナヌウアの神々が生れた。

その外、この母の脇腹から出て來たルウがある。

この女は、尙、「怒」と「嵐」と「烈風」とを生んだ。同時に、それらに續く平和をも生んだ。

そして、「これらの靈魂の源泉の在る場所から、使者達が方々に派遣される」

然し、テフラは、かうした親子關係には、或は異論が出るかも知れないと言つた。然し、此處に最も正統な分類がある。

神々は、アトウアと、オロマトウアとに分たれてゐる。

然し、これらの話は、非常に長くて難解だ。だから止さう。
そればかりでなく――この書物を讀むのに、かうした參考事項は蛇足である。
だから、此處いらで止めて、テフラとの散歩の話をする事にしよう。

＊　＊　＊

此處では何時でも天氣ばかりだから、何日だつたか忘れて了つたが、或る朝私達は、二人で三里程ある友達の小舍を訪ねるために小舍を出た。
朝の六時に立つて、清々しい空氣の中を急ぎ、凡そ八時半頃に着いた。これは、突然思ひ立つた訪問だつた。だからひどく驚かれた。そして挨拶がすむと人々は、私達の御馳走の小豚を探しに出掛けて行つた。そして豚は屠られ、その上鷄が二匹加へられた。またその朝の取り立ての見事な蛸やタロやバナナなどで、私達の食事は澤山ありうまいだらうと

思はれた。

私は、晝食迄の時間で、マラの洞穴を見物に行かうと言ひ出した。それは、度々通りながらまだ見物しなかつた所だつた。

少年と三人の娘とテフラと私。

この連中で、洞穴迄の短い間を元氣に歩いて行つた。それはついその近くにあつたのだ。

この洞穴は殆んど全部梨の樹におほはれて、道端からは、岩の凹凸のやうにしか見えない。然し、その枝を除けて、一米程高く行くと、暗い空洞に這入る。其處には何もない。眼は、外界を領してゐる太陽の記憶を失つて了ふ。只その底が、百米程離れて、赤い床のある幕なしの小さな舞臺のやうに見えるだけだ。

四圍の壁は、ひどく大きな蛇のやうな形をして、それがこの内部の湖の表面へ、水を飲みに、ゆつくり滑り落ちて來てゐるやうだ。

これは、岩の裂目を通つてゐる襞だつた。私は、水泳をやらうと言ひ出した。然し誰も贊成しない。皆この水はひどく冷たいから駄目だと言ふ。そして皆は別に固まつて長い間

相談しながら、大聲で笑ふ。私はひどく好奇心を起した。そしてやはり水泳を繰り返して言つた。たうとう若い娘達は、決心してその輕い着物を脫ぎ、皆腰にパレエオを卷きつけて水に入つた。

皆大きな聲で toe toe（冷たい、冷たい）と叫ぶばかりだ。水は跳ね飛び toe toe を木精する。

「僕と一緒に行かないか」私は、奥の方を指しながらテフラに言つた。

「氣でも違つたの？ あの奥は大變遠い……それに鰻がゐる！ だからあんな方へ行つた人は一人もゐない」

そして彼女は、輕く波の立つてゐる岸の上で、いかにも水泳の巧みなのを自信してゐる若い娘のやうな樣子で、水を叩いてゐた。

唯一人で行くのは、少し恐かつた。然し私も、水泳術のうまさを信じ、唯一人で泳ぎ初めた。どうした奇異な現象が起るのか、私の進むに連れて、洞穴の奥の方は次第に遠ざかつて行つた。然し私はぐんぐん進んで行つた。四方から、蛇が私を皮肉な樣子で見凝めて

ゐるやうだつた。私はふと大きな龜が浮遊してゐるのを見たやうに思つた。殊に、私に挑み掛るやうに頭を水平に浮び上らしてゐるやうな氣がした。然しこれは、すべてくだらない事だ――海龜が、こんな淡水の中にゐる筈がないのだから。

やつぱり私は、氣が狂つたのだらうか。それとも、架空な事でも信じ易いマオリイ人のやうになつて了つたのだらうか。私はこの時、かうした疑問をすつかり押へて了ふ事が出來なかつた。私はひどく恐ろしくなつて來た。少なくとも恐怖に近い氣持になつて來た。而かも私の前には波が立つてゐる。それは鰻だ！

この恐怖に打ち勝たねばならない。私は、この洞穴の奧を見極める爲に、勇氣を出して眞直に飛び込んで行つた。然しどうしても着けない。また私は浮び上つた。私は強く勢をつける爲に、底を蹴らうとしたが、かがとも土にふれる事が出來なかつた。テフラは私の方に叫んでゐる。

「歸つて」

私は後を振りかへつた。テフラがひどく遠方に見える。どうした現象からか、こんなに

距離の感覺が無限に延びる。テフラは、まるで明るい圓の中の小さな黑點位にしか見えなかつた。

喧しく言ふな……そんな事を言ひも終らずに、私はまた泳ぎ出して熱心に半時間程泳いだ。そして、遂に初めから一時間程して、漸く目的の場所に着いた。

其處には平凡な小さな高地があり、目前には洞穴があいてゐる。其處から何處に通じてゐるのだらうか？それは神祕だ。私は白狀しなければならない、少し怖くなつて來たのである。

私は歸つて來た……テフラが一人で待つてゐた。他の冷淡な仲間は、もう歸つて了つて其處にはゐなかつた。

テフラは祈りをあげた。そして二人は歸り道についた。

氣持の好い大氣の中に出ると、テフラは私を拭いてくれた。私はまた暑くなつて元氣になつた。

然し私は、テフラの微笑のうちに、一種の嘲笑を感じた。彼女は私に言つた。

「怖くはなかつた？」

私は圖々しくもこんな事を言つた。

「我々フランス人は、物に怖がると言ふ事がない」

然し、別にテフラはそれを感心したやうでもなかつた。そして、近くにある香ばしい花を摘んで來てその髮に差してやつても、當り前のやうな顔をしてゐた。路は爽快だつた。海は雄大に輝いてゐた。前にはモレアの山が壯大に倨傲に聳え立つてゐる。生きる事の輝かしさよ。この空腹へ、宿に待つてゐる小豚を食へばどんなにうまいだらう。

* * *

優勢なアトウア達は、總てタアオラの子供や孫達だ。——卽、まづオロ、これは父を繼いで神々の筆頭に居り、二人の子供がある。その他、テタイ・マチとウウルウ・テフエタ、

テトウア・ウウルウ・ウウルウの父親ラア等だ――

この神々は、各々その特殊な權力を持つてゐる。我々は、既にテフアトウとマアフウイとの創造したものは知つてゐる……

タアネの口は、第七番目の空だ。――即、人間にその「姓名」を與へたこの「神」の口は、空の最端にある。其處から、地上を照らす光が出るのだ。

リイイは地球から空を離した。ルウイは大洋の水嵩を増した。そして、硬き大陸の土壤を破壞して、現在島々をなしてゐる數多の部分に割いた。

フアヌウラの頭は雲に屆き、その足は海底深く屆いた。そこで、他の巨人フアトウウイと共に未知の國エイヴアへ、人間を食ひ荒す豚の群を退治する爲に降りて來た。

盜賊の神ヒロは、その指で岩に洞穴を掘つた。そして、不思議な場所に巨人の隱して置いた處女を救ひ出した。彼は、只一方の手で木を引き離して他日犯罪の場所の見えないやうにした。だからその妖力は消えて了つた。

下等のアトウア達は、人間の生命や勞働と利害關係を持つてゐる。

アトウアとは次の如きものである。――鮫の神、航海者の守護神マホ、谷の女神男神、歌ひ手俳優舞踏家の守護神ペホ、それから醫者の守護神ラアウ、呪咀と魔法を妨いで貰ふ爲に人々の寄進するノ・アパ、勞働者達の神々オ・タヌウ、大工と建築師の守護神タネ・ステ・フウア、屋根師の守護神ミニアとパペア、網作りの守護神マタチニイ、これらだ。

オロマトウアは、家の神、氏神である。それらに二種ある。然し、一般にオロマトウアと呼ばれ、守神と呼ばれてゐる。

オロマトウア達は、爭鬪の首魁を罰し、家庭に平和を保たしめる。それらは、次の如きものだ。――各家庭に於ける死んだ男女の靈なるヴァルア・タアタ、幼なくして自然死を遂げた子供達の靈なるエリオリオ、出産の時に死んで、蟋蟀の體になつて行くと信じられる子供の靈プウアラ、これらだ。

かうした守護神は、人間に依つて或程度迄假定され、意識的に想像された神格である。人間は、別に選擇もせず、少くとも表面的には何の選擇の動機もなしに、その眼に映ずるもの卽その對象を、神にして了ふものだ。そして、そのもの卽對象に、その神々しい感情

を捧げるのである――例へば、鱶だつてマオリィ人にとつては神となるであらう。そして彼等は、それに象徴的な感情を献げ、その後は、事ある毎にその意見を聽くやうになるであらう。歴史的小唄や物語りの中には、動物の變化した神々の神話が數限りなくある。これは、マオリィ人が、既に印度の輪廻の説を知つてゐた爲だらうと思はれる。

アトウア達とオロマトウア達の次には天界の最後の階級に屬するティィ達が來る。このタアオラとヒナ（月）との子供は數限りなくある。それらは、神よりも劣つた精靈だ。然し人間ではない。それらは、マオリィの天地創成論では、生物と無生物との中間にあつて、あらゆる侵略に對し、無生物の權利や力やその特權を保護すると言ふ。

その起源は次の如きものである。

タアオラとヒナが寢てティィが生れた。

ティィは、その妻アニィ（慾望）とねた。そこから、夜の「慾望」が生れた。それは、暗黒と死の使者だ。それから晝の「慾望」が生れた。それは、光明と生命の使者だ。それから、神々の「慾望」が生れた。それは、天界の利害の使者だ。尚、人間の「慾望」が生

れた。それは、人間界の利害の使者だ。

また、動植物を守る內界のティイが生れ、生物や海のものを守る外界のティイが生れ、海濱と地震のティイが生れ、それから、岩石と硬地のティイが生れた。

尙その次に、夜の事變、晝の事變が生れ、來往干滿授受享樂が生れた。

ティイ達の像は、マレエ(寺)の端に建立されて、聖地の境界線をなしてゐた。然し、歐羅巴人の侵略と、一神敎の渡來の爲に、この偉大なる文明の跡は破壞されて了つた。マオリイ人は、今日では、我々との接觸の爲に、その自然な感じを失つて了つてゐる。而かも彼等は、動植物と生活を共にしながら、人間の生活に必要な調和ある才能を豊かに賦與されてゐる民族だつた。――然し現在では――我々の學校で、新しく野蠻といふ事を學び、美そのものさへも殊更藝術の傑作品として學ぶ現在では、彼等は物質的にも精神的にも非常に廢頽してゐる……

月は、マオリイの「架空的考察」の中に、重要な位置を占めてゐる。昔は、月を祀る盛大な祭典があつた。そして、月は屢々アレオイの傳統的神話の中に引用されてゐる。然し、

世界の調和の中で、人々の月に與へた役目が、果して積極的なものであつたか、それとも消極的なものであつたか、それを斷定するのは困難な事だと思ふ。

勿論讀者は、以前私の述べたヒナとテフアトウとの會話を思ひ出される事と思ふ。

此の如き話は、オセアニアの聖書を蒐集し解釋しようとしてゐる聖書解釋者には、いゝ材料を提供する事だらうと思ふ。それらの人々は、自然力崇拜の上に立てられた宗教の要素を發見するだらうと思ふ。――それは、あらゆる原始宗教に共通な性質だ。だから結局マオリイの神々は皆種々の原素の人格化である。――その要素は、二つの性質を持つてゐるやうだ。それに就いて私は、假定の吟味を事としてゐる學者諸氏に、今此處では只指示するに止めて置かうと思ふ。

それは、第一に、生命の獨特にして普遍的なる二つの原質を指示し、やがてはそれらを最高の融合に還元せしめんとする清澄さである。一は靈魂と智惠だ。卽男性的なるタアオラだ。他は、純粹な物質で而かも神自身の肉體の或部分を構成するもので、女性、卽ヒナである。ヒナとは、單に月の名のみではない、「大氣のヒナ」、「海のヒナ」、「內界のヒナ」

がある。然しこの名は、單に大氣、水、土、月の原素を表はすのみである。卽太陽、蒼空、光明とその世界、これらはタアォラである。然し、この物質と精神間の區別の明瞭なるにも拘はらず、マオリィ創成の根本には、物質の結合を認める事が出來る。卽「偉大にして神聖なる宇宙はタアォラの殼に過ぎない」と言ふ事だ。だからこの質朴なる自然崇拜は、原始時代に於ては、非常に稀な哲學的豫感によつて、奇異な事をするものだ。我々はタアオラと、ヒナの諸々の影像との、相次いで起る融合の中に、太陽が影像の原素に及ぼす永遠にして變化ある力を知る。同時に、この融合の結果出來上つたものゝ原素にも、光と熱は同じやうに變化を及ぼして行く事を知つてゐる。我々は、多種多樣の象徵の中に、非常に異つた範圍に對する同一の思想を見出し勝ちなものだ。卽基本となる原因、豐かなる物質、及びその成果、原動力、動かさるゝ物、及び運動そのもの、換言すれば、靈魂と物質と生命、これらのものは、唯一つのものを構成してゐるのである。——これがマオリィの宗教の最も特殊な性質であつて、思索家の注意を促す必要のあるものだと思はれる。

第二に興味のある點は、マオリィ人が、月の中に、生命を持つた生物の終局せるを認め、

而かも、生命そのものはないが、物質を無限に増加して行く運動のしるしを認めてゐる事だ。卽何か本質的に女性なるもの——物質——があると言ふのだ。これに反して、地球や人間の中には、(此處で斷言するのは困難だが)生命の發展に於ける後天的なものを認めてゐる。この後天的なものは、發展の際には置き去りにされて了ふ運命を持つものだ。この「發展」と言ふ字を書きながら、私は發展といふ事を考へて見た。そして、西洋の高遠な學理から見れば、このタアオラ崇拜者達の考へ方は、ひどく馬鹿げてゐると言へるかも知れないが、然し私は、「地球は滅亡するであらう、人間は死ぬであらう……然し月のみは亡びないであらう……」と言ふ言葉の中から、物質發展の跡を見出す事が出來る。彼等は、月の盈虧にも拘はらず、或は寧ろその永遠の運動の原理を表はす連續的な動きの爲に、月といふ天體を、永遠なる事象の中心に置いた。月は、再び明るくなる爲にのみ消えて行つた。再び浮び上る爲にのみ沈んで行つた。そして、物質を支配する法則に從へば、それは永遠に不滅で、その中の總てのものは變化はあるも滅亡する事はない。だからヒナは特に物質を表象する。而してマオリィの敎義は、前述の如く物質も亦永遠に不滅であると斷定

する。太陽も不滅だ。タアオラの精靈も永遠に續いて物質の運動を促すであらう。そして、その物質と合して永遠に新しき生命を創造して行くであらう。然し、土や地上の人間並びに棲息物は、タアオラとヒナの豐かな融合の結果出來上つたものではあるが、それらは生命の宇宙的詩歌の一挿話をなすにすぎないものだ。だから、地球の滅亡と共に再び生れ變る事なしにそれらは死滅して了ふだらう。然し、「月は決して亡びないであらう」この言葉の持つ思想を受け入れ、月は光輝ある靈の光に依つて、永遠に豐かな物質を象徴してゐるといふ事を考へると、永遠に滅亡してゆく地球や人間も、また新しい生物となつて、新しい土地に永遠に生れて來るものだと斷定しても好いと思ふ。そして、かうして生れ出た生物が、前の生物よりも優れたものだと想像するのは妥當な事だ。――これこそ、進化論の一形式ではないだらうか？――

一方、精神的歷史的の見地から見れば、あのヒナとテフアトウとの會話からは、全然異つた解釋が生じるかも知れない。「月」卽「女」の意見は、死のみが生命の神祕なる發展を保つて行くものだといふ事を知らない女性的な弱さを持つた盲目的な意見であらう。そし

て、テフアトウの答は、民族的豫言であつたらうと思はれる。即、古代の偉大なる一人の靈魂は、その民族の生活力を分析し、その血管の中に、復活する事の出來ない、また、適當な救濟方法のない死の萌芽を豫見したのだ。そして、「タヒチは亡びるであらう、再び甦る事なしに死んで行くだらう」と言つたのだ。

進化論、物質の融合、かうした高遠な教養の證査を、この古代食人種の思想の中に發見して感動しない人があるだらうか？勿論、私は事實に何の粉飾をも加へなかつたつもりだ。而かも、モランフウの誠實な記述だけは、非難するわけには行くまいと思ふ。

テフラは、かうした深遠な考察を、總て知つてゐたと言ふのではない。彼女は、流星の中に女神の靈魂と、流浪せるテュパポウがゐるのだと言つてきかなかつた。その祖先と同じやうに、蒼空はタアオラ自身であり、タアオラから生れたアトウア達は、やはり空の原素をなすものだと無意識的に信じてゐた。そして、星に人間的感情を想像してゐた。私は、最も實證的な科學が、この詩的空想を如何なる點まで許すか、それは知らない。また、最も進歩した科學が、如何なる點までそれを打破して行くかも知らない。

テフラは、一つの宗派、一つの宗敎的政治的祕密結社の事を、如何にも勿體らしく話した。さうした宗派の勢力は、古代の偉大なる封建制度、卽「アレオイの結社」の時代には、その島の最も優勢なものだつた。幾分子供らしく混亂した然し恐怖と敬虔の念の熱情に滿ちたテフラの話を通して、私は、古代人が神聖なる人格を附與してゐた、偉大にして恐ろしき特異な制度を洞察し得るやうな氣がした。私は、莊嚴なる犯罪に滿ちた悲痛な物語を想つた。又、解釋し難い神話、よく守られた祕密の中にそつと隱されてゐる道德を見るやうな氣がした。

私も以前から、「結社」の起源が神祕の幕に包まれてゐる事は知つてゐた。そして、その起源に關する物語、各世紀每に種々の解釋の下される問題を知りたいと思つてゐた。だから私は、今こそ、タヒチに求めて來た精神的に豊かな、最も重要なもの〻一つを見つけ得たわけかも知れない。

だから私は、テフラがその知つてゐる事をすべて話してくれた時、そのあらゆる方面に渉つて種々穿鑿してみた。そして整理した話がこれだ（モランフウより引用）。——歷史的

眞實と言ふものは、寓話的構想の下には半ばしか現はれてゐないものだ。

タアオラの子オロは、その父に次いで神々の最長者となつた。そして、或る日、人間の間から、或る一人の乙女を擇ばうと決心した。彼は、その女と共に、俗衆の中に、あらゆるものに優れ而して特權を有する種族を創立しようと考へてゐたので、その女は處女であり美人でなければならなかつた。

そこで彼は、七つの空を橫ぎり、ボラ・ボラ島の高山パイアの上に降りて來た。其の山には彼の妹、テウウリイとオアアオアの二人の女神が住んでゐる。この三人は、人間の形に變つて、オロは若き武士に、その妹達は若き娘になつた。そして、神の接吻を受くるに足る造物主を發見する爲に、諸方の島々を訪ねて行かうと決心した。

オロは、虹をとつて、その一端をパイアの頂に掛け、他を地上に掛けた。そんなにして神とその妹達は、谷を越へ海を渡つた。

諸方の島々では、人々は彼等を歡待した。この三人の莊麗にして魅力ある旅人は、盛大な祭典を催した。其處へは、あらゆる女達が集まつて來た。オロはその女達をしらべた。

然し彼は、愛されはしたが愛する事が出來なかつた。彼の心は悲しみで一ぱいだつた。人間界の娘達は、この若き武士の眼差しを、長く捉えてゐる事が出來なかつたのだ。こんなにして數日、彼はすつかり疲れて了つた。そしてまた蒼空に歸へつて行かうと考へた。その時彼は、ボラ・ボラ島のヴアイタペのアヴアィ・アィアと呼ばれる小さな湖水で水を浴びてゐる非常に綺麗な若い娘を見かけた。

彼女は、脊がすらりと高かつた。そして、夜は、戀の神祕がその髮の毛に眠る如く、今は、太陽の熱が、その肌を金色に輝かしてゐた。

すつかり魅せられたオロは、その妹達に、あの若い娘の處へ行つて彼の事を話して來てくれと賴んだ。その間彼は、パイアの頂で、妹達の交涉の結果を待つてゐた。

女神達は、若い娘に近づきながら挨拶し、その美貌をほめ稱へた。そして、彼女達はボラ・ボラ地方のアヴアノォから來た者だと話した。そして、

「私達の兄が」と二人は附け加えた。「お嫁さんになつて下さるかどうかを伺つて來いと言ひました」

ヴァイロウマティは——この若い娘は、さう言つた——この見知らぬ人々を注意深く見凝めてゐた。そして言つた。

「あなた方は、決してアヴァノォの方ではありません。それでも、そのお兄樣が、頭であり、若くつて美しい方でいらつしやるなら、そんな事は何でもありません。どうぞお越し下さい。ヴァイロウマティは、その方の妻になりませう」

テウウリイとオアアオアは、その兄にこの承諾された事を知らせたい爲に、急いでまたパイアに登つて行つた。

轣てオロは、最初と同じやうに、虹に乘つてヴァイタペに下りて來た。

ヴァイロウマティは、その人々を迎へる爲に、果實を置いた卓子と、最も美しい莚と、非常に豐かな敷物で出來た床を用意してゐた。

そして、海邊の、椰子やパンダヌスの木影で、優しく强き聖なる二人は、お互に愛し合つた。神は每日パイアの頂きに歸り、夜になると、ヴァイロウマティの許で眠る爲に降りて行つた。——それから後は、如何なる人間と雖も、人間の形をした彼を見る事は出來な

かつた。而かも、常にパイアとヴァイタペの間には、虹がその道をこしらへてゐた。

荒れ果てた七つの空にあつて、オロの隱れ場がわからなくなつてから、長い月日はすぎて行つた。そこで、タアオラの二人の子、オロテフアとウウルテフアは、また人間の形をして、その兄弟を探し出す爲に出發した。彼等は、長い間、諸々の島々を當て度もなく探し歩いた。そして、ボラ・ボラの聖なるアンゴオの木影にヴァイロウマティと休む若き神を見つけた。

彼等は、その若き女の麗はしさにすつかり驚いて了つた。そして、何か贈り物を捧げねば近よれないやうな氣がした。そこでオロテフアは、牝豚に變り、ウウルテフアは、赤い羽に變つた。そして、牝豚と羽が固定すると、彼等は、彼等自身に變つた。そして、この贈物を持つて、二人の前に近づいて行つた。オロとヴァイロウマティは、この二人の莊麗な旅人を喜んで歡待した。

その夜牝豚は七匹の子豚を生んだ。その第一番目は後日の目的の爲に畜へられ、二番目は、神に供へられた。そして、三番目は、客へのもてなしとしてこの旅人に捧げられた。

第四番目は、「戀愛の爲の多數の犧牲者の小豚」と名づけられた。第五番目と第六番目は、種族增殖の爲に、最初の母となるまで保存された。

最後に、第七番目の豚は、マオリイ風にそのまゝ熱い小石の上で燒かれ、人々はそれを食つた。

それからオロの兄弟達は、やがてまた空に歸つて行つた。

數週間經つと、ヴァイロウマティは、懷姙した事をオロに告げた。

オロは、最初ヴアポアの神の寺院マレエに供へられてゐた第一番目の豚をとつた。其處に彼は、マヒと呼ぶ一人の人間を見出した。そして、その豚を渡しながら言つた。

「この小豚を取りて、大切に保護し置くべし」そして神は、莊嚴な口調でつけ加へた！……

「こは聖なる豚なり。その血もて、我より來る人間の腰部に血塗るべし。我は、この世界の父なればなり。而して、これら人間はアレオイの民となるべし。我は旣にこの地に止まるを得ざれども、我は、汝をアレオイ人と名づけむ」

マヒは、ライアテアの長に會つた。そして、彼にこの話をし、長の友達でなければ、こ

の聖なる委託物をうまく保つて行く事が出來ないので、彼は言つた。

「私の名をあなたがとり、あなたの名を私がとる事にしよう」

長（おさ）はそれに同意した。そして彼等は、一緒にタラマニニィの名を稱へて祈つた。

此の間にオロは、またヴァイロウマティの傍に歸つて來てゐた。そして、彼女が男の子を生む事、その子には「空の聖なる友」と名づくべき事を命じた。然し、彼の時間はもうなくなつてゐた。彼は、もう其處を去らねばならなかつた。

そこで彼は、偉大なる火柱となり、不可思議な光景のうちに、ボラ・ボラの最高峰ピリルレの上に登つて行つた。其處から彼は、涙にぬれた妻や人民にはもう見えなくなつて了つた。

Haa Tabouté Rai（空の聖なる友）は、偉大なる頭（かしら）であつた。そして、人間共に數多の善行を施した。そして、その死んだ時彼は、ヴァイロウマティが女神になつてゐる空の上にゐた。

このオロと言ふのは、何時の頃かわからないが、この島の結社へ波羅門教の教義を傳へ

たといふ、迷へる波羅門の僧侶であつたかも知れない。既に私は、オセアニアの宗教の中には、印度の輪廻の說の痕跡のある事を言つて置いた。而かも、この鮮明な哲學的敎義に依つて、マオリイの智者達が覺醒された事は事實であつたやうに思はれる。理解ある人々は、彼等相互に認め合ひ、必然的に俗衆とは孤立して、一定の祭典を擧げる爲に集つた。而して彼等は、その種族の他の人間達よりも高い希望に照されて、その島の宗敎的政治的統治を一手に收め、重要な特權を潛有し、アルキペルの歷史に於て最も光輝ある時代とされてゐる非常に强力な封建制度を布いた。

アレオイ人は、文字は知らなかつたが眞の學者だつた。彼等は、終夜注意してその古き傳統の言葉を暗誦した。その原本は、文字ではあらはされてゐず、數年間の不斷の努力に依つて說明されたものだからだ。これらの神々の言葉は、アレオイ人に中心の確信と、思案の習慣を與へ、周圍の者達の頭を垂るゝ超人間的威嚴を與へはしたが、然し、單に註釋の外つけ加へる事の出來ないものだつた。私は、歐羅巴の歷史の中に、この宗敎的軍隊的結社より以上に怖ろしく神祕的なものを知らない。而かも、そこから、國家の利益を計る

爲に、「神々」の名に依つて、生死を司る力が發生したのだ。

アレオイ人は、人身御供が神々に喜ばれる事を敎へた。そして、マレエ(寺)に於て、長男を除く外の子供は全部犧牲に供する事にしてゐた。これは、その種族を永續さす爲に一匹の豚を蓄へ、他は全部屠られて了つたといふ物語の七匹の子豚をあらはしてゐる。

かうした、他の多くの原始民族も從はねばならなかつた野蠻な義務は、深刻な社會的原因並びに一般的利益を持つてゐたに違ひない。昔のマオリイ種族の如く、非常に繁殖力の强い種族にあつては、人口の無限の增加が非常な危險を齎らした。勿論島々の生活は安易であり、そこに生存する爲には、多くの生產品は必要ではなかつた。然し、自然的に制限され、渡航出來ない廣大な海に圍まれた地域は、無限に增加する人々に依つて、次第に侵されて行く事になつた。

海は、充分な魚類を供給しなくなつたであらう。森は、充分な果實を產しなくなつたであらう。だから、人肉嗜食は、「多分」人口過剰による飢餓のみがその原因であつたと思ふ。而かも、私は種々の形式に於ても、マルサスの議論には、人肉嗜食より外に好い解決方法

を與へないだらうと言ひたい。地上の或る一點に餘りに多く密集した人間は、文字通りお互に食ひ荒し合ふやうになるのは當然だ。移民でも、移民自身が無數の死の假面の一つでないとすれば、それは、因數の轉換によつて問題の解決を延期するのと同じだと思ふ。さうしたゆつくりした延期をやつてゐる事の出來なかつたマオリィ人は、一つの根本的な組織を採用したのだ。そして、大人の殺戮を免れる爲に小兒殺戮に忍從したのだ。然し、きつと彼等は、既に人肉嗜食に恐怖を感じてゐたに違ひない。而かも確かにこの點に於て、アレオイ人は、その國民的習慣を變へる爲には、異常な力が必要であつた。彼等は、宗教的威嚴と、尊ぶべき後繼者であつた古代の傳統の力とに依つて、これを民衆に押し付ける外に道がなかつた。

嬰兒殺しは、この種族にとつて永年の淘汰の方法であつた。肉體的精神的の力は、青年時代の子郎長子に與へられた。この怖るべき長子權は、同時に生命權でもあつた。――それは、また國民の間に力と信念の德を養ふ事になつた。この死の一定不變の狀態と繁出とは、決して無益にして有害なものではなかつた。戰士達は、その死を怖れなくなり、一般

國民は、熱帶的隋眠を妨ぎ、不斷の睡魔を荒立つる極度の感情的意力を感じてゐた。而かも歷史的事實から見れば、マオリイ種族は、その悲劇的習慣を捨てゝ了つた結果、その繁殖力の減少を來たした事は明らかだ。——この習慣がその繁殖の原因ではないとしても、やはり我々に何かを考へさせる處がある。

アレオイの結社では、賣笑は神聖な制度であつた。それを我々が變へて了つたのだ。それは、もう神聖なものではない。强制的なものでもない。——それは、昔の性質を失つてしまつて、單なる賣笑制度になつて了つてゐる。

宗敎的使命は、父から子に傳へられ、子は幼にしてその仕事をする。

初め「結社」は十二の組に分たれ、十二人の上層のアレオイ人がその偉大な酋長になつてゐた。その下に下層階級があり、その次にアレオイの徒弟があつた。そして、種々の高官達は、腕、兩脇、肩、足、踝に彫んだ特殊な文身に依つて區別されてゐた。

* *
*

私は今、アレオイ人がタヒチを治めてゐた遠い時代の偉大な封建制度の話をして來た。次に、私は、國王の即位式に關する報告をつけ加へて置きたいと思ふ。

それは遙かに遠い往古の事だ。その昔。（Matamua !）

新しき國王は、莊麗な服裝に包まれ、島の高官達に圍まれて宮殿を出る。その前には、アレオイの酋長達が、その髮に最も珍らしい羽をさして行く。

國王は、その供奉員達と共にマレエ（寺）に行く。彼が着くと、門口に待つてゐた僧侶達は、喇叭（貝殼）や太鼓を叩いて儀式の始まるのを知らせる。それから、國王と供奉員達を寺院の中に招じ入れる。その神像の前には、死せる人間の供物が置いてある。

國王と僧侶達は、一齊に祈禱を唱へ歌ふ。それがすむと、僧侶は、その人間の供物の兩眼をくりぬく。そしてその右の眼は神像の前に捧げ、左の眼は、それを食ふやうな形に口を開けてゐる國王に捧げる。それから、その眼はまたもとの體にあてはめられる。

軈て神像は、僧侶達の前にある彫刻された擔架に乘せられ、新しき國王は、數人の酋長の肩に乘つて、出發の時と同じやうに、アレオイ人を從へながらその偶像について海岸の

方へ列を組んで行く。多數の國民は、其の後に從ふ。牧師達は、その道につれて、喇叭を吹き太鼓を叩き踊り續ける。

海岸には、この儀式に用ひる爲に　綠の枝と花で飾られた聖なる獨木舟が浮んでゐる。その中に偶像を運んで了ふと、大僧侶は國王の着物を脫がせ、裸體のまゝで海の中へ連れて行く。國民はこれを、海中で鱶の神が國王を愛撫し洗ひ淸めるのだと信じてゐた。暫くして、海の洗禮を受けた國王は、聖なる獨木舟に乘る。そして大僧侶は、彼の腰の圍りにマロ・ウールーを卷きつけ、頭には、タウマタを卷きつける。これは、崇高の意味を表はす王冠だ。

やがて「國王」は、聖なる獨木舟の前に立つて國民の方へ向く。國民は、今迄の長い沈默を破つてその喚聲をあげる――Maeva Arii（國王萬歲！）

この急調子な最初の動搖の騷音がやむと、國王は、マレエから神像を運んで來た聖なる擔架に乘せられ、人々は來た時と同じやうな列を組んでマレエの道を歸へつて行く。牧師達は神を捧げ、酋長達は、王を捧げてゐる。また、牧師達は、音樂を奏し踊を踊りながら

その行列の先頭を切り、國民がこれに續く。今や國民は、歡喜に溢れて、國王萬歳を叫び止まない。

神像はまた莊重に祭壇に安置される。これで、宗教的祭典は終るのだ。

次には、國民的祭典が初まる。これからの事象を描寫するのはむつかしい事だ。然し私は、この點に關しても、他の點と同じやうに、海外布教師達が、その目的の爲に、この國の祖先達を輕卒に誹謗し去つたものだと考へてゐる……

さて莚の上に横たはつた國王は、「國民の最後の敬意」を受ける。多くの男女は總て皆裸體で、放逸な踊を踊り乍ら、國王の周圍を廻る。そして、彼等の身體のあらゆる部分を、國王に觸れようとする。それは國王が、最も卑猥な汚れを洗いでくれるからだ。

これは勿論汚らはしき光景である。然し私は、其處に如何なる美も見出し得なかつたと言へるだらうか？國王は、マレエに於て、空とタアォラから聖體を受け、海中では外界のヒナから聖體を受けた。そして、最後にその國民に最後の敬意を受け乍ら聖體を授けるのだ。この儀式は、勿論野蠻で亂暴なものである。其の點でこれは嫌惡すべきものだと思ふ。

然し私は、この野蠻な中に、ある偉大さを認めた。——それは、一人の人間に對して、その愛を捧げる國民全體だ。そして、この人間とは國王だ。明日からは、彼は國主となつて、その受け繼いだ天職を、その意志に從つて處理して行くであらう。そして國民は、唯一時間の自由を持つてゐるのみだ。その夢中になつた熱狂的な亂舞も、すぐに終つて了ふのだ。どうしてこれを嫌惡する事が出來よう？それは、神の許しを得て、思ひのままに發揮する野蠻性なのだ。

軈て聖なる喇叭や太鼓が急に鳴りひびく。それは、敬意や祭典の終りを告ぐる合圖の音であり、家に歸るべき合圖である。最も熱狂してゐた者達も、その合圖を聞くと一齊に鳴りを沈める。そして、國王がその從者をつれて宮殿に歸り初める頃には、あたりに崇高な靜けさが漲つてゐる。





第五章

十五日程前から、今まで餘りゐなかつた蠅が、急に多くなつて來てたまらなくなつた。

然し、マオリイ人達は、皆それを喜んでゐた。それは、鰹や鮪が沖の彼方からのぼつて來るからだ。蠅は、大漁の時期を知らし、それがタヒチに於ける唯一の勞働の時期である。

誰も皆、その糸や釣針の頑丈な出來具合を調べた。そして、子供も女も、陸と

岩との間の海底に陸に沿うて滿ちてゐる珊瑚礁の上に、大きな網を引いた。それは、網と言ふよりは、椰子の葉の長い垣と言つた方が好い。この網引きは、鮪の好むある小さな魚を取る爲なのだ。

漸く三週間餘りもかゝつて用意が出來上ると、結びつけられた大きな二艘の獨木舟が海上に浮べられた。その軸には、大きな竿が附いて、艫に固定してある二本の綱で、勢よく引き上げられるやうになつてゐる。(その竿には釣針と餌がついてゐて、魚の喰ひついた時には、そのまゝ水から上げられ、小舟の中に入れられるやうになつてゐる)

私達は、環礁線を越えて、遠く沖の方へ漕ぎ出した。私は今でも、海龜が水面に頭をつき出して、私達をぢつと見凝めて過ぎた事を思ひ出す。

漁夫達は皆愉快さうで、元氣に漕いで行つた。

私達は、鮪の「穴」と呼ばれる非常に深い場所に着いた。其處は全くマラ(註)の洞窟の傍にあつて、夜となれば、魚の群は、鱶さへ近よれないその深い場所に眠ると言はれてゐる。

（註）これは東洋印度に於ける死、ひいては罪と不思議な暗合を示してゐる（釋迦傳）。東洋印度のあらゆる佛達は、現世の愚なる生存を終つて、中央亞細亞の一人の母から更生して來る。その母は彼等を生んで七日目には死んで了ふ。彼等はすべて同じ教義を說き皆マラ卽死に打ち勝ち、ひいてはその罪にも打ち勝つ。

海鳥の群が、鮪を取らうとして、その「穴」の上を飛びまはつてゐた。そして、一匹でも水面に浮び上ると、すかさず海面に舞ひ降りて、その肉の塊を咬へてまた舞ひ上る。海にも大氣の中にも、吾々の獨木舟の中にも、すべてみな殺戮の氣が漲つて、それが行はれてゐた。

私は、どうして穴深く長い糸を垂れて鮪を釣らないのかと訊いてみた。相手は、それは出來ないのだと言つた。それは聖なる場所で、其處には、海の「神」が君臨してゐるのだ。

＊　＊　＊

私は、そんな物語を聞いた事がある。その話は、苦もなく思ひ出せる。

タヒチの海神の一人ラナ・ハトウは、海底深く此處に眠つてゐた。するとある漁夫が、不謹愼にも其處に糸を垂れた。その釣針は、神の髮にからみついた。だから神は眼を醒ました。憤怒に燃えた神は、その休息を妨げるやうな不禮を働いた者の何者だらうと海面に浮び上つて來た。そして、その罪人が人間だと知ると、その神は、この侮辱の償ひとして人類總てを亡ぼさうと決心した。

然し、この罰は、深い意味のあるらしい寛大さで、この唯一人の罪人だけが免れる事になつた。

神は彼に、その家族全部を連れて、トア・マラマへ行けと命じた。それは、或る人に依れば島或は山と言ひ、或る人々は、獨木舟或は「方舟」（註）だと言ふ。

（註）モランフウは、このトア・マラマは「月の武士」を意味すると言つてゐる。そして、この語原は、少なくとも民衆の信ずる處に依れば、ノアの大洪水に何かヒナの影響があつたのだと言ふ事を考へさすものだ。

漁夫とその家族が、その指定された處に着くと、海水は次第に滿ち初めた。そして水は最

も高い山をも被ふやうになり、あらゆる生物を亡ぼして了つた。然し、ただトア・マラマの上に(或は中に)脫れてゐた者達だけは助かつた。そして彼等は、その後その島々に繁殖した。

さて私達は、その鮪の穴を過ぎて行つた。そして、或る男が、獨木舟の船頭の命令で、竿を海中に沈め、釣針を投げ込んだ。

皆は長い間息を殺して待つてゐた。然し、鮪は少しも喰ひつかなかつた。

次には、他の漕手の番だつた。そして今度は、見事な鮪が喰ひついてその竿を撓めた。四本の逞ましい腕が、後の綱を引いて、その竿をあげた。鮪は海面に現はれて來た。然しその時、大きな鱶が私達の獲物に飛びついた。そして、恐ろしく鋭い齒で度度咬みついた。だから取り立ての鮪はたゞ頭だけになつて了つた。

今度は、私の番だつた。船頭が私を指名したのだ。私は釣針を投げ込んだ。間もなく、今度は巨大な鮪が釣れた。――その時私は、横の人人が笑ひながら囁いてゐるのを耳にした。然し別に氣にもとめなかつた。魚は、頭を棒で打たれ、斷末魔の苦しみからピクピク痙攣しながら、獨木舟の中をのた打ち廻つてゐた。そして細かく輝く鏡のやうな體は、數

限りない光を投げてゐた。

二度目も亦私はうまく釣つた。確かに、フランス人に運が向いてゐたのだ。友達は、私を好運児だと言ひながら愉快さうにほめてくれた。私は、すつかり得意になつて、それらの讃辭を受けた。然し、こんなに稱讃してくれる中に、やはり最初釣り上げた時と同じやうな囁きと、よく意味のわからない笑ひをはつきり感じた。

漁は夕方迄續いた。そして、餌にする小さな魚のなくなつた頃には、太陽は水平線を眞赤に染めてゐた。十四の鮪は獨木舟に積まれ、人々は歸りの用意を初めた。

人々の整理してゐる間に、私は、一人の若い子に、私の釣つた二度とも、囁きや低い笑ひ聲の起つたのはどうしたわけだらうと訊いてみた。少年は返事をしたがらなかつた。然し私は、マオリイ人がちつとも抵抗力を持つてゐず、ぐんぐんつめかけて行けば、すぐに負けて了ふ事を知つてゐたので、倘も問ひつめて行つた。すると相手は、すべてを打ち明けて話してくれた。——若し釣針が、魚の下腮に掛つて上ると、夫の留守の間にその妻は不義を働いてゐるしるしなのだ。而かも、私の釣つた場合はさうだつたのだ。これを聞いて、

私は別に信じようともせずに一笑に附して了つた。

さて私達は歸途についた。

熱帶の夜はあはただしく暮れる。だから陽光のある中に歸らねばならない。逞しい二十二本の腕は、海中に櫂をさし、漕手達は元氣をつける爲に拍子をとつて叫んだ。夜光に輝く舟跡が、私達の獨木舟の後に續いた。私は、恐ろしい逃走をやつてゐるやうな氣がした。――まるで、恐ろしい大洋の主（あるじ）達が我々を追つかけ、奇異な魚の群のやうに、我々の周圍を飛び跳ねてゐるやうだつた。

二時間の後、私達は、環礁の入口に到着した。海は狂ほしく碎け、水道は、そのあたりの淺瀨で危險だ。獨木舟でうまく波を切つて進むのはなかなか容易な業ではない。然し、土人達はうまいものだ。私は強い興味を以て、勿論少しばかり怖かつたが、そのあざやかに操られる舵さばきを見つめてゐた。

私達の前方の陸には、彼方此方に灯が輝いて動いてゐた。――それは、椰子の枯れ葉で作つた大きな松明の焰だ。これは、すばらしい眺めだつた。――輝く波に近い砂地には、

漁師の家族達が、私達の歸りを待つてゐるのだ。或る者はぢつと坐つて動かない。或る者は、海岸に沿つて、疳高い聲で叫びながら、飛び跳ねる子供等を連れて往來してゐた。

獨木舟は、一搖れ大きく搖れて砂の上に上つた。

そこで皆は、獲物の分配を初めた。

魚は地上に並べられ、親方は、鮪釣りとその餌の魚取りに加はつた人々へ、男も女も子供も同じやうに分けた。

私の妻は、すぐに斧を取つて木を割り、火をつけた。その間に私は、少しみなりを直し、夜氣の冷たさに重ね着をした。

私達二人の分け前のうち、一つは燒き一つはテフラが生のまゝしまつて置いた。

それから彼女は、ぽつぽつ漁での種々の出來事を聞きだした。私は喜んでその好奇心を滿たしてやつた。彼女は滿足さうに無邪氣で、すつかり陽氣になつた。私は、私の心を領してゐる祕そかな不安をあらはさずに、彼女をぢつと見凝めてゐた。私の心の底では、諦めた事ではないが、不安な氣持が動いて、眼がはつきりさめるばかりだつた。私はテフラ

に、質問を、ある一つの質問をしたくてならなかつた……そして、こんな事を獨言ちてみたりした——そんな事聞いたつて何にならう？するとまた、わかるものか？そんな事を心の中で答へる。

床に就く時が來た。私達は、並んで横になつた。私はふと、

「おとなしくしてゐたね」と言つた。

「ええ」

「それで、今日のお前の好い人は、氣にいつたのかい？」

「私に好い人なんかない」

「嘘言だ。魚がとつくに知らしてくれたぞ」

テフラは起き上つて、私をぢつと見凝めてゐた。彼女の顔は、初めて、私のまだ見た事のない神祕な威嚴のある樣子に變つた。あの子供つぽい態度から、こんな顏が出て來ようとは夢にも思つてゐなかつた。全く新しい雰圍氣が、この小舍の中に生れて來た。私は、何か莊嚴な者が、私達の間に立ち上つたやうな氣がした。私は、我にもあらず、ある「信仰」の

起るのを感じた。そして、高い處からのさとしを待ち受けてゐるやうな氣がした。たとへ或る迷信からにせよ、一人の信心深き女の熱心な態度を前にして、我々のとるに足りない疑ひにふりかゝる痛ましき報ひを感じながら、私は、天のさとしの來る事を疑へなかつた。

テフラは、靜かに戸を閉めに行つた。そして、部屋の眞中に來ると、次のやうな祈りを聲高くあげた。

私をお救ひ下さい！お救ひ下さい私を！
今は夜でございます。神樣の夜でございます。」
おゝ神樣！私の傍近く、
おゝ神樣！私の傍近くお守り下さい。
呪咀や惡口からお守り下さい。
余りに早く死にませんやうに、
惡や呪ひを犯しませんやうに、

祕そかなたくらみからお守り下さい。
地を侵す爭ひから。
そして、私達の周圍には平和の溢れますやうに、
おゝ神樣！狂ほしき戰ひからお救ひ下さい。
恐しき侵略から。
つねにその髮の逆立ちて、
私をおびやかすものから。
そして、私と私の心の常に生あるやうに
おゝ神樣！

その夜私は、しみじみ祈りがあげたくなつた。
彼女の祈りは終つた。彼女は、私の傍に來て、眼に涙を一ぱいためながら言つた。
「私を打つて下さい。うんと叩いて下さい」

この眞面目な顔と、神祕な體を前にして、私は、十善の偶像の面影を見るやうな氣がした。

この自然の妙なる作物の上に、私が手を上げるやうな事があつたら、その腕は永遠に呪はれてあるに違ひない！

彼女はすつかり裸體ではあつたが、まるでオレンヂ色の純粹に黃色い着物を着、ビスウの金色のマントウを着てゐるやうに見えた。タヒチのノアノアの薫る金色の麗しき花、私は藝術家としてもそれを稱讚せずにはゐられなかつた！……

彼女は繰り返へす。

「私を打つて下さい。うんと叩いて下さい。長く怒つてゐては病氣になるから」

私は彼女を抱いた。今、私の心は、何の疑ひも持たずに彼女を愛した。そして、佛の言葉を囁いてゐた。

「然り、溫和もて强暴に打ち勝たざるべからず、善もて惡を、眞もて僞りを打ち鎭めざるべからず」

彼女には、私がすつかり變に見えたに違ひない。この夜を通してテフラは、私には全く
神聖な者のやうに見えた。

*
*　*

陽光はまた輝かしく登つた。明け方、人の好いおばさんが、新鮮な椰子の實を持つて來
てくれた。
そして、訝かしさうにテフラを見てゐた。彼女は知つてゐたんだ。
そして、ひどく優しい態度で私に言つた。
「昨日あなたは、釣り上げたんだつて？何も變つた事はなかつたかね？」
私は答へた。
「すぐまた行つてみたいと思つてゐる」







第六章

私はフランスへ歸らねばならなくなつた。止むを得ない家庭の事情が起つたからだ。

さやうなら、情深き土地よ、心よき土地よ、美と自由の國よ！私は、滯在二年餘のうちに、二十年も若くなり、來た時よりも「野蠻」に、然し遙に賢くなつて歸つて行く。さうだ、此處の無智なる野蠻人は、この年老いた文明人に、色々の事を敎へてくれた。生きて行く術を、そ

して幸福になる方法を教へてくれた。

波止場を去つて船に乘る時、私は、テフラを最後に見た。彼女は、幾晩も幾晩も泣き續けてゐた。今は疲れ果てて悲しさうに、ぢつと石の上に坐つてゐる。その垂れた足の、兩方の大きな堅い足先は、鹽水に觸れてゐる。さつきあの耳につけてゐた花は、その膝の上に萎れて落ちてゐる。

彼方にも此方にも、彼女と同じやうな人々が、すつかり疲れ果てて、言葉もなくぼんやりと、暫しの友達だつた人々を運んで行く船のつれない煙を見つめてゐた。そして、船橋に立つて雙眼鏡を手にすれば、彼等の唇の上には、今も尙マオリイの古い詞のあらはれてゐるやうな氣がした。

——南と東の輕き微風よ、お前らは、縺れ合つてたはむれ、私の顏を輕くなでる。あの島へ打ちつれて吹け、その島の愛しき樹蔭に私を捨てた人が憩ふてゐる。その人に、泣きぬれた私を見たと告げてくれ——

ノア・ノア

定價　壹圓八拾錢

版權所有

大正十五年九月七日印刷
大正十五年九月十日發行

譯著者　前川堅市

發行者　北原鐵雄
東京市小石川區表町一〇九

印刷者　山本源太郎
東京市牛込區東五軒町四〇

發行所
東京市小石川區表町一〇九
アルス
振替東京二四八八八番
電話小石川三五七〇番

アルス美術叢書

第一編

セザンヌ

有島生馬著

新興藝術の母、エポツク・メーカー・ポール・セザンヌ畫集にして評傳

ポール・セザンヌは現代藝術のエポック・メーカーである、いな近代藝術史上の最もいちじるしいエポック・メーカーである。『セザンヌ以後』といふ言葉がやがていはゆる新興藝術を意味してゐるごとくに彼に依つて新らしい藝術の時代は其の進出のスタートを切られたのだ。本書はセザンヌ研究の第一人者たる有島氏が心血を濺いで成りし新評傳、附するにセザンヌ作品年代表及び住居年代表を以つて讀者に便ならしめた。

別刷原色版二葉・別刷寫眞版六拾四葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

アルス美術叢書

第二編

ゴオホ

中川一政著

焔の畫家
灼熱せる
情感の狂
畫家ヴン・
ゴオホの
大畫集に
して評傳

彼れは二十世紀の大轉期に於て「藝術」に一廻轉期を與へた運轉手である。「セザンヌは基礎を定めた。そしてゴオホは最上の頂點に立つて翻つてゐる旗振りである」とゴルドンはその評の第一にそう云つてゐる現代新興藝術の第一峰は全くセザンヌによつて築かれた。そしてその頂點に立つてゐる旗振りはまさしくヴインセント・ヴン・ゴオホである。著者中川氏は多年畫室の餘暇をぬすんで凡ゆるゴオホの評傳を研鑽渉獵し今やその薀蓄を傾注されてものされた畫壇に注目の焦点となりし快著である。

別刷原色版二葉・別刷寫眞版六拾八葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

アルス美術叢書

第三編

ピカソ

神原泰著

立体派運動の急先鋒なるパブロオ・ピカソの畫集にして評傳なり

二十世紀の初め突如としてパリに現れた怪物——ピカソは忽ちにして現代の畫壇を占領してその指導者となり、『青時代』から『立体派』へ、而して今や『新古典派』へと豹變しつゝ大衆を率ゐてゐる。實にセザンヌ以後の美術は彼れによりて代表される。本書は日本に於けるピカソ研究の第一人者たる神原氏が特に懇切且つ丁寧に評傳すると共に最優秀最代表的の作品七十餘を集めて彼れの全面目を躍如たらしめてゐる。

別刷原色版一葉・別刷寫眞版六拾四葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

アルス美術叢書

第七編

ルウッソオ

足立源一郎著

稀有なる創意と途方もない卒直さを持てるルウッソオの畫集評傳

ルウッソオは生涯を通じて畫を描く事のみを鐘愛した。單に途方もない卒直さ、自然なる情緒、感動さす單化ばかりでなく其作品には稀有なる特性を保有した創意と一つのスチールがある。特に彼自らの天賦が自然の心が赤裸々に虚僞の一點をも認め得ない純朴があるこの天禀ある藝術家を直に理解し讃美せるは專門家意外には僅かな文人と愛好者丈であつた。この天才の畫を斯も類多に收めしは未だ世界の何處にもない。

別刷原色版二葉・別刷寫眞版六十四葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

アルス美術叢書

第八編

寫樂

仲田勝之助著

古今世界に誇るべき浮世繪の驍將東洲齋寫樂の畫集にして評傳

本巻には世界に誇るべき劇畫家として古今獨歩の稱ある東洲齋寫樂が紹介された。一線一描悉く正確なリアリズムから來た彼れの犀利な技法、その色彩は吾人をして驚嘆措く能はざるものである。浮世繪史上の重鎮として、獨逸のクルト博士の詳しい研究により寫樂が一躍レンブラントやベラスクエスにさへ比肩すべき世界的一大肖像畫家たる榮譽を負ふに至つたその神品として光輝益々大なるを加ふるを見られよ。

別刷原色版二葉・別刷寫眞版六十四葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

アルス美術叢書

第拾三編

アルキペンコ

矢部友衞著

彫刻の形體革命に徹底せるアルキペンコの代表的作品と其評傳

現代の藝術家には必ずしも畫家、彫刻家等の區別をおく必要はない。彼等は等しく直感表現——現實の主感を表現する人達である。彫刻と繪畫との分界線を撤廢してしまひ、唯造型として表現を行はんとする運動が新興藝術の中心を占むるに至つた。この點で最も成功せるは、實にアルキペンコであつて純粋直感からのみの造型化に、彼獨特の徹底さを見る事が出來る。本書は本邦藝術界に激甚なる影響を與へずにはおかぬ。

別刷原色版二葉・別刷寫眞版六拾四葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

アルス美術叢書

第十六編

グレコ

黒田重太郎著

新興藝術の先驅者最も主觀的なる表現の保持者多角的な其藝術

グレコは新興藝術の父である。第一に强烈な影響を受けたものは實にセザンヌである。立體派の創始者ピカソも彼の感化を受けたこと甚大で彼の畫室の壁間は悉くグレコの復製を以て覆はれてゐた。その他後期印象派から現代の諸派に至るまで彼の多角的な藝術は至るところに其の光芒を現はしてゐる。古きグレコを知ることは最も新しい現代の藝術を理解する事である。

別刷原色版二葉・別刷寫眞版六十四葉

定價壹圓八拾錢・送料八錢

西洋美術の知識

一氏義良著

最も高踏的にして、民衆的なる一大西洋美術史出づ。全部總アート紙印刷、鮮麗無比の挿畫數百圖を加へ古今の美術の一大展覽場たらしめた。

本書は、世の所謂案内書的のものではない。著者は多年の經驗の全てを傾けて、西洋の美術を述ぶるに、原始時代より、未來派、構成派に至るまで西洋美術とはどんなものかを、ありのままのすがたにおいて眺めるために、すぐに役に立つやさしく面白く、しかし正確な材料を、特に文化史的背景の前で、具體的に活躍させて描いたもので、美術に對する精細なる知識と的確なる理解とは、他の美術史と類を異にする所以である。

挿畫の豐富、裝幀の善美も亦他の匹儔を見ざるものである。

原色版 六葉　別刷寫眞二十葉

挿畫三百餘葉　本文五百餘頁

定價 参圓八拾錢・送料 十二錢